
近距離恋愛中！

若林夏樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

近距離恋愛中！

【Nコード】

N4916F

【作者名】

若林夏樹

【あらすじ】

立花悠と立花悠。名前の漢字だけでなく、背も趣味も試験の点数もほとんど同じ2人のドタバタラブコメディ。ケンカばかりだった2人がようやく恋を知ったとき、はたして2人は？

ブローグ 出会い

あいつとの出会いは、高校2年生の春。

先生によってあいつの名前が書かれたことがそのはじまりだった。

『立花悠』

これを見た瞬間、クラス中の視線が一瞬にしてこっちに集中した。3文字で済む名前の漢字がすごかったわけではない。問題は名前そのものにある。

「ハルカ！あんた、編入することにしたの！？」

「ってゆーか、なんで一緒の名前？」

次々と飛び交う質問に答えられずにいたのは、他ならぬ彼女だった。

なんせ彼女の名前は——・・・

「まあ似てるけど、新しい生徒は『たちばなゆう』って読むからな。

『たちばなはるか』とは違うからな。いいぞー入れー」

先生の言葉と共に、教室に入ってきたのは……………

「どもっ！大阪からやって来ました、立花悠ゆうです！なにコイツとか思わんとして、ぜひとも仲良うしたってください！よろしくう！」

とても元気で明るくて、それから中学生かと疑うほどの童顔男で、とにかくこの瞬間クラスの女子の一部のハートをゲットしたことだけは確かだ・・・たった1人の女子を除いての話だが。

この大阪から来た編入生は多くの注目を浴びて、なぜか彼女の隣

に座った。

「おっ！立花コンビが並んだな」

「へっ！？」

それが初めてお互いに顔を合わせた瞬間だった。

立花悠と、立花悠の2人が——・・・

ブログ 出会い（後書き）

はじめまして。

こんな作品ですが、時々見てくれたら嬉しいです。

第1回 立花1号2号（前書き）

これは高校2年生の5月頃の話です。

第1回 立花1号2号

いつもの朝、いつもの教室。弁当を食べ終えた後の授業は特に眠くなる。

「ぐがー……ぐがー」

豪快ないびきをかいて堂々と寝ている生徒が2人いた。それはいつもわかっていることで、ある意味名物になってきている。

「起きんかあつー！立花1号2号ー！」

ばしんと容赦なく教科書を叩きつけられ、ぐえっとカエルが潰れたような声を出して慌てて起きた2人組みはきよきよと周りを見渡した。

目の前には2年5組の担任中尾先生。通称ゴリオ。

「お前らなあ……毎度毎度俺の授業で寝やがって……何のために学校来てるんか！」

「お勉強するためです」

「嘘つけ！しかも今日はいびきまでかきやがって」

こんなことはしょっちゅうで、今では教師の間で居眠り常習犯としてブラックリストに載っているらしかった。

「先生違うで。いびきかいてたんは俺ちゃう。2号や」

そう言ったのは、ブラックリストの1人、立花1号こと、立花悠^{ゆう}。

「違うよ！私がいびきなんてかくわけないじゃん！絶対1号ですよ！」

言い返したのは立花2号こと、立花悠^{はるか}。

1号と2号の言葉に、ゴリオはふるふると震え、そして憤怒ふんどした。
「黙らっしゃい！！後で2人とも職員室に集合！！」
「……………はい」

元々ハルカは真面目な生徒ではなかったが、ユウが編入してきてから彼女の不真面目さがなぜか目立つようになってきた。

「おかげでこっちはいい迷惑だっつーの」

ゴリオにたつぷりと怒られた後、罰として日直の仕事である教室掃除をすることになり、ハルカはぶつぶつと呟きながらほうきを動かしていた。

「はよ終わらせるで。俺部活行かなあかんし」

テキパキと手を動かすユウに対し、ハルカはジジ臭いため息をついて相手にも聞こえるような声でぼそとまた呟いた。

「ああ。確か158cmの君はバスケ部に入ってるんでしたよね」

「身長は関係ないねん！要はハートや！ハート！」

おせじにも高くない身長で廃部寸前だったバスケ部にユウが入ったとは噂で聞いたのは、編入してすぐのことだった。

ちなみに身長はハルカと同じで、体重を絶対知りたくないと思う。

「コラ。手え動かせ言うてんのがわからへんのかい」

「うるっさいなあ……そういう1号だつてさきから動いてないじゃん」

「なんじゃとー！俺は教室の3分の2はやったで！」

「やだやだ。レディーに3分の1もやらせるつもりなの？」

「レディー？どこにおるん？」

「目の前にいるやる！ボケー！！」

口ゲンカの流れで関西弁がうつってしまったところで、ハル力は廊下を歩いている1人の人物に気づいて慌てて口を止めた。

「どうしたん？」

不審に思ったユウが尋ねてくるが、ハル力はぶんぶんと首を振ってごまかす。

たった今、廊下をハル力が片想いしている男が歩いていたなんて言えるわけがなかった。絶対からかわれるから。

「何？お前、高橋のことが好きなんか？」

いきなりその人物の名前を言われて、さすがにハル力はどきつとしました。

「なっなんで・・・なんであんたが高橋君、のこと知ってるの・・・」

「いやゝあいつんち、俺んちの近所やし」

しかし、急にユウの顔が何かを企むようなニヤリとしたものに変わった。途端にハル力は嫌な予感がしてきた。

「へー・・・おもしろいやん。覚えとこ」

「ちよつと待て！」

「ほな行くわ」

ほとんど誰にも言ったことのない恋心を、よりによって最も知られたくなかった人物に知られてしまった。

「さいあく・・・」

ハル力は泣きたい気持ちになった。

第2回 スピード交際

「体育祭？」

その単語が出たのは、5月の半ば頃になってからだった。ハル力たちの通う高校では、毎年6月にそれが行われるのだ。

「でもウチの体育祭って走る競技しかなくて毎年盛り上がりがないって噂だよな」

「まあね。たぶん1組の高橋君がぶつちぎりだろうね、100メートル走は」

その名前が出るとやっぱり緊張してしまふ。それがわかってて、ハル力の友達、宮崎衣里えりはからかってくるのだろう。

「ハル力、まだ好きなんだ？高橋充みつるのこと」

「まだって何さ。私は一途な女なんです」

「いいじゃーん。この際、立花1号に乗り換えちゃうとか」

そんなことを考えたこともないハル力は、初めて想像してみても身に虫唾むしずが走るのを感じた。

ユウが一部の女子に人気があることは知っているが、その一部にハル力が入っていないのだ。

と、そのとき、急に目の前に自転車に乗った2人組が飛び出してきて、ハル力と衣里は危うく正面衝突しそうになった。

とっさに動くことができずに立ち止まった女子2人と、急ブレーキで自転車から放り投げ出された男子2人の目がそのとき合う。

「なんだ・・・2号かいな」

「なによその言い方。危うくこっちはひかれかけたんだから」

「あれっ？衣里ちゃんだ。ごめん・・・大丈夫だった？」

「もりしー！ううん。大丈夫だよ。それよりこっちこそごめんね？」

自転車に乗っていたのは、立花悠と6組の森下和樹、通称もりしーだった。

「急に飛び出してこないでよ！危ないじゃん！」

「飛び出すもなにも、そっちが赤信号なんにのろのろ歩いてんのが悪いやる！？」

「なにさー！いること気づいてたんなら、もっとゆっくり走ってよね！」

「気づいてへん！ぶつかりそうになる直前に全てを悟った！」

「ほんとに大丈夫？無理しなくていいんだよ？」

「大丈夫だって。もりしーは優しいね」

「・・・それは相手が衣里ちゃんだからだよ」

「えっ・・・！？」

「ずっと片想いしてきたから」

「なっ・・・そんな・・・もっと早く言つてよ！私だってずっと好きだったんだからっ」

さすがにおやつ？と思って、ハルカとユウが振り返ると、なぜかそこには1組のカップルが出来上がっていて、ひしつと抱き合っていた。

立花コンビが口を半開きに見ていると、2人の視線に気づいたもりしーがにっこりと笑ってこっちを見てきた。

「俺たちつきあうことにしたから」

「展開早っ！」

「ありえん！どないしたらこうなるんや！」

さすがにこの立花コンビが常識人に思えるほど、2人はスピード交際だった。

朝のホームルームにて、ハルカや衣里と仲のいい友達、小山亜美こやま あみにそのことを話すと、

「えー！すごい！よかったね、衣里ちゃん」

拍子抜けするくらい和やかな言葉が返ってきた。

衣里がでへへと照れる中、ハルカはうーんと頭を抱えてしまった。

それにしても、衣里が誰かとつきあうことになるなんて思いもしなかった。

見た目はすごく綺麗なのだが、衣里は勇気を出して告白してきた少年たちをあつさりと呼ぶことが多かったのだ。

好きな人がいるとは言っていたが、それがまさか1年生のときに同じクラスだったもりしーだったなんて・・・

「さて！私の恋も叶ったことだし、今度は2人の恋を応援しようかな」

にこにこ笑顔で衣里に言われると、ハルカも亜美も恥ずかしくなってしまった。

「わっ私・・・好きな人なんていないよ」

「またまた・・・亜美ちゃんだったらどんな男も惚れるね」

そう言われて照れる様子がまたかわいらしい。ハルカにはない仕事草だった。

こんな話をしていると、ハルカも恋をしなくなってきた。いや、してるにはしてるのだが、ただ単純に高橋のことをかっこいいと思っただけなのだ。

「ハルカは・・・高橋君なんだよね」

「や、好きかどうかまだわかんないけど」

「まあ今度の体育祭見たらまた評価変わるかもよ」

その衣里の言葉の後、体育祭のそれぞれの種目が決まった。

ハルカと亜美はリレー。衣里はリレーと200メートル走。そして、ユウは高橋と同じ100メートル走だった。

第2回 スピード交際（後書き）

ちなみに、ユウとハルカをカタカナにしているのは漢字で書いたらややこしいからです。

ちょっと微妙ですけど、気にしないで下さい。

第3回 位置について

体育祭を間近に控え、2年5組は6組と合同で体育の時間にその練習をするようになった。

その中で1人、長い時間準備運動をしている男がいる。

「おい！まだ走んないのー？」

その声に気づいて、初めて顔を上げたのが立花悠ゆうだった。

「……もりしー……100メートル走代わってくれん？」

「もう選手変更はできないから」

にこにこ平和的な笑顔で森下和樹に言い放たれ、ユウはしょんぼりと頭を下げた。

「なんだって急にそんなこと言うんだよ？」

ユウは種目を決めたとき、高橋が去年圧倒的な速さで100メートルを走ったなんてことをまだ知らなかった。100メートルだけ避けられてるなとは思ったが、まさかそんな裏があるとは思わなかった。

「わかんないだろ？もしかしたらいい勝負かもしれないし」

励ましているつもりなのだろうが、勝てると言わないところから相当高橋の足が速いことがわかる。

「別に誰に負けたって気にせんけど、向こうが勝ってあいつが喜ぶと思うと、なんかしゃくじゃー」

くしゃくしゃと頭をかきむしると、あいかわらずにこにこ笑ったもりしーが一言呟いた。

「何言ってるかわかんない。とりあえず1本走ってみようか」

もりしーの手にはいつのまにかストップウォッチが握られていた。

「あ、かたわれが走るみたい」

宮崎衣里の言葉に気づいて、立花悠も運動場の隅を見る。

そこでは、もりしーにタイムをとってもらって走るユウの姿があった。

それは一瞬のようだった。無理のない体勢で自然と体が前に出るような走り方だった。

そして、流れるようにゴールし、どんどん減速していく。ハルカは一時見惚れてしまった。

「速いね」

衣里の感想に気づいて、ようやく我に返ったハルカは慌てて自分のバトン練習に専念した。

「ハルカは実際にどっち応援するわけ？好きな男か、同じクラスの男か」

1番困る質問をされて、ハルカはうつと言葉に詰まってしまった。正直、考えたくないことだった。

「そりゃあー・・・自分のクラスを応援するべきなんだろうけど、相手が立花だから、高橋君を応援しちゃうと思う」

素直に答えると、衣里にやれやれとため息をつかれた。

と、そのとき、走り終えたユウと目が合った。

向こうがべーっと舌を出してきたのを見て、ハルカも出し返すと共に、絶対高橋を応援しようと心に決めた。

体育祭当日、絶好の運動日和になった。

「ぜってー優勝するぞー！オー！！！」

5組は円陣を組んで気合を入れると、そのすぐ後、1組のテントからさらに大きな円陣の声が聞こえてきた。

ハル力はその中に高橋がいるのを見つけた。

1年生のときはいっぱい喋れたけど、今はもう無理だな・・・
そう思っ て視線を戻すと、露骨にこっちを見てくる視線に気づいた。

「なにさ。レディーをじろじろ見るなんて失礼だよ」

「うわっ！そういうのはほんまにレディーになれたら言いなされ」
あいかわらずのユウは、その童顔で毒舌を吐く。本当にこれさえなければ応援してやらないでもないのにかわいくない。

「まあ100メートル走で負けても泣くなよ」

慰めるつもりなどさらさらないが、一応言っ てやると、ユウは心底嫌そうな表情になる。

「俺は負けん。そっちかて高橋が負けても泣くなよ」

「高橋君は負けんもん！」

ムキになって言い返したが、つーんと無視されてしまった。

そして、100メートル走の予選が始まり、走るブロックが違っ たために高橋とユウの競走は見れなかったが、決勝で同じブロックで走ることが決定した。

予選のタイムはほぼ同じ。コンマ1秒差でユウのほうが速かった

らしい。

インターハイレベルの戦いに、この決勝はすごく注目された。

「位置について……」

審判の合図で、6人がクラウチングスタートの構えを取る。

「用意——」

パンツというピストル音と共に、彼らは走り出した。

第4回 勝負の行方

勝負は一瞬だったが、その間は立花悠^{はるか}にとって長い時間に感じられた。

スタートした瞬間、頭1つ飛び出たのは間違いなく立花悠^{ゆう}だった。しばらくトップを走っていたが、真ん中辺りで高橋に抜かされて、その後ろから走ってきた2人の男子にも抜かされた。

「1組、2組、7組、5組、4組、8組の順でゴールしましたア！」

そのアナウンスがかかったとき、5組のテントでは落胆のため息が出た。

すぐに正確なタイムも出たが、ユウのタイムは予選をはるかに下回る結果になった。

ハルカたちがリレーの召集のために集合場所に向かっているとき、視界の片隅にユウが入ってきた。

ただそれだけなら別に気にすることはないのだが、彼がいる場所というのが救護テントだったのが気になってしまう。

「ごめん・・・ちょっと先行ってて」

衣里^{えり}と亜美に伝えてから、ハルカはそこに向かってみた。

「なんやねん」

ユウの開口一番がそれだった。なぜか不機嫌そうな顔をしている。「なんやねんって・・・その、なんでここにいるんかなって思ってたしどろもどろに言っと、ちよつと包帯を巻き終えた後らしく、ユ

ウが養護教諭にお礼を言ってぴよこんと立ち上がった。

「よかったやん。高橋がぶっちぎりやで」

「あんたはどうしたの？その怪我いつしたのよ」

「んー・・・ちよつと100の予選のときにへマったっぽい」

足をぶらぶらとさせながら、ユウは答える。そして、苦笑しながらハル力を見てきた。

「ここ連れて来たん、高橋なんやで。ほんまあいつはすごいわー。完敗や」

それと同時に、目の前に高橋が現れた。

えっと驚いて何も言えずにいるハル力に対し、ユウはにこやかに会話していく。

しばらくして高橋がハル力を見てきた。

「立花さん、久しぶりだね。もしかして邪魔だった？」

「何言ってるの。変なこと言わないでよ」

「ちやうからなー。誤解すんねん」

普段そんなふうには言わないユウが自分を気づかっていることに気づいて、ハル力はどうにもやるせない気持ちになった。

その後、高橋はすぐにテントに戻ると言って立ち去ってしまった。

「追わんでええの？」

「なんで追うの。いいんだよ。どうにもならないってことぐらいわかってんだから」

そう・・・それを聞いたのは半年くらい前。高橋には中学からつきあっている彼女がいるということを知った。

わかってたけど、やっぱり好きだったんだ。

急に暗くなって、ハル力はその場にしゃがみ込んでしまった。

今は顔を見られたくない。泣いてはないが、きつとひどい顔して

る。

ユウは何も言わずに、ただただたくハルカの頭をばんぽんと叩いただけだった。たぶん高橋に彼女がいたことをユウも知っていたんだろう。

「立花さー・・・どうにもならないけど、それでも誰かをずっと好きだったことかある？」

「——そりゃあったでー・・・あんさあ
「なによー」

「お前、リレーの招集かってんちゃう？」

「はっ！やばい！忘れてた！！」

慌てて立ち上がって集合場所まで向かおうとすると、

「立花！」

その声に驚いて振り返った。そこには仁王立ちしているユウの姿があった。

「ガンバレ！」

耳を疑いそうになったが、素直に受け止めることにした。ハルカはにっこりと笑って頷いた。

「ハルカ遅い！どこ行ってたの！」

受付ぎりぎりの時間に滑り込んで、ハルカは所定の場所についた。すぐ前では衣里が怒っている。

「ごめんごめん。ちよっとトイレで立て込んだじゃってさー」

誤解されそうな発言だが、すぐにリレーの入場が始まってそれ以上突っ込まれることはなかった。

そして、リレーが始まる。ハルカは8番走者だった。

2年5組の男子がテントで応援しているのが見える。その中に、ユウがいることに気づいた。

そういえば、100メートル走決勝で自分は誰を応援したんだっけ？

ハルカがそう考えようとしたとき、前の走者が走ってきたので考える余裕がなくなった。

とにかく走ることに集中したかったから――

第4回 勝負の行方（後書き）

ちなみに、彼らが住んでいる所はたぶん愛知だと思います。
三河弁バリバリなので。じゃーん、とか。

第5回 夏休み

「いいか。もっぺん言うぞ。あれほど忘れるなど言っただはずだ」

「・・・ハイ」

「お前らのために5回は言っただはずだ」

「・・・ハイ」

「まあ期待はしてなかったけどな」

「なんでですか！もーちょっと期待してもええやんけ！」

「っていうか先生！こんなのと一緒にしないでください！私はちゃんとやりました！机の上に忘れてきただけです！」

今日提出しなければならぬ宿題を忘れた生徒2人組を叱る中尾先生、通称ゴリオ。

そして、忘れてきた生徒、立花悠と、立花悠^{はるか}。2人そろって立花1号2号だ。

この光景は今ではすっかりおなじみになってきている。

「ぶつぶー。やったって忘れたモンは忘れたモンや」

「あら？1ページもやってない人に言われたくないわー」

2人の言い争いが始まりそんな雰囲気を感じ、慣れたゴリオはすぐさま一言呟いた。

「明日提出・・・しなかったら、お前らの通知表覚悟しとけよ」それは立花コンビの急所に当たった。

教室に帰ってそのことを宮崎衣里と小山亜美に話すと、案の定衣里には笑われて、亜美にはとても心配された。

「とうとうハルカの通知表にも1がつく日が来たかもねー！」

「そっそんな・・・大丈夫だよ！中尾先生優しいから、そんなこと絶対しないよ」

対照的な2人の言葉を聞き、ハルカはげっそりとため息をついた。

「っていうかさ。ごめん、話変わるけど、2人とも夏休みどっか遊びに行かない？」

そう。通知表が配られるということは、夏休みが近づいているということだ。

衣里の言葉で、途端にハルカのテンションが上がった。

「行く行く！亜美ちゃんも行こうよ！」

「うん！遊びに行きたい！どこ行こっか？」

亜美がそう言うのと、衣里は待ってましたと言わんばかりに1冊の雑誌を取り出した。

それは真ん中辺りのページでドッグイヤーがされており、そこには、

「『夏はやっぱり！遊園地だ！』遊園地か・・・いいじゃん」

「でしょでしょ？ハゲシマのチケット安く譲ってもらえたんだ。みんなで行こうよ」

地元で1番大きな遊園地、それがハゲシマだった。

「うん！行きたい！っていうか、行こう！」

こうして通知表のこと忘れて、気分はすでに夏休みだった。

8月3日、その日は高校の補習もなく、しかも晴天で絶好の遊園地日和だった。

待ち合わせ場所の駅から電車で10分。バスに乗って20分くらいの所にハゲシマは位置している。

「よっしゃー！入ろつかー！」

1人テンションの高いハル力だったが、衣里がやたらと腕時計を気にしていることに気づいた。

「衣里？なんか用事でもあんの？」

「うっうん。なんでもないない」

引きつった笑顔を浮かべて、衣里は1人さっさと入場ゲートに向かっていく。

ハル力と亜美はただ首を傾げるだけだった。

しかし、その違和感に気づいたのはそれからすぐのことだった。

「もりしー！」

いきなり衣里の口からここにいるはずのない彼氏の名前が出た。はじめは何を言っているのかわからなかったが、ようやくゲートの傍に3人組の少年がいることに気づいた。

「はあああああー!？」

「なんでー!!！」

「あれっ？偶然じゃーん。もりしーたちもここに来てたんだー」

「そうそう。もしかして衣里ちゃんたちも？」

「そうなんだ。そうだ！これから一緒に遊ばない？大勢のほうが楽しいし」

「もちろんオツケーだよな？」

森下和樹が振り返ると、一緒に来ていた立花悠と、2年5組の不良、菅原翔太が不機嫌な表情でもりしーを見る。

2人はもりしーと衣里が図っていることに気づいたのだ。

「・・・おかしいと思ったんだ。いきなり遊園地に行こうなんて言い出すから」

「はははー・・・なんのことかわかんないなー」

「ほな、なんでこんなまわりくどいことしたんや？素直に言ったらいいんに」

ユウの言葉に、につこりと笑ってもしーは答えた。

「だって言ったら、立花来てくれないかもしれないから」

ちらりとハル力を見ながら言うと、ユウは心底長いため息をついた。

「いいじゃん！トリプルデートみたいで楽しいよー！」

うきうき気分のもりしーと衣里。何を考えているのかわからない菅原。おろおろしている亜美。そして、話せば口ゲン力になることがわかっていて、お互いに何も喋ろうとしない立花1号2号。

6人のデートが始まった。

第6回 意外な一面

予想外にハゲシマの客の入りは多かった。

「はぐれないようにね」

「大丈夫だよ。もりしー」

先頭を切って歩いている森下和樹と、宮崎衣里。

その後ろから誰に対しても分け隔てなく接する小山亜美と、その彼女にうち解け始めている菅原翔太。

そして、互いに何も喋ろうとしない立花悠^{はるか}と、立花悠^{ゆう}。

「ねーみんなー！最初に何乗りたい？」

亜美が振り返って尋ねる。

みんなが何がいいか考え始めたそのとき、2つの声が同時に重なった。

「スカイジェット2008！」

言った張本人たちが驚いてお互いに驚いて顔を見合わせる。

「なんや。たまにはええこと言うやないか」

「そっちもね。まともなこと言えるんじゃない」

ハルカとユウはニヤリと笑い、もりしーたちを見た。

「いいよ。じゃあ。先に立花たち並んでよ。俺たちちょっと飲み物買ってくるから」

「オツケー！！」

ハイテンションで答えるハルカとユウはそのとき、もりしーたちの計画にまだ気づいていなかった。

「やられた．．．．．」

スカイジェット2008に並び始めて1時間近くになったとき、
ようやくハルカたちはもりしーたちが来ないことに気づいた。

慌てて衣里に電話をかけてみると、

『うん。言わなかったけど、あんまり絶叫系好きじゃないんだよね。
でもあんたたちは好きそうだから、私たちに構わないで思う存分乗
ってきてね』

「はあああつ！？なにそれ？」

『じゃそういうことだから』

そう言って一方的に電話は切られた。

待つてよー．．．こんなまるでデートみたいでやだよお．．．

「宮崎さん、なんやて？」

隣にいたユウがいぶかしげに尋ねてくる。

「や．．．絶叫苦手だから乗らない、って．．．」

「ふーん．．．．．」

絶対この後、なんで2号なんかと一緒におらなきゃなんないねー
ん、とか言うに決まっている。

しかし、ハルカがそう覚悟しているのに対してユウは、

「ほな、絶叫好き同士、めっちゃ楽しもうやないか！」

その童顔でさらに幼く、かわいく見える笑顔に、一瞬ハルカはど
きつとしてしまった。

「意外」

「なにがや」

「なんでもない」

まさかいつも口ゲンカばかりしているユウを、一瞬でもかわいい
と思ってしまうたなんて言えるわけがなかった。

スカイジェット2008は絶叫好きにはたまらない、とにかくス
リル満点のコースターだった。確かに、苦手な人にはこれは無理か
もしれない。

ハルカはユウと一緒に他の絶叫系にも乗り込み、思う存分楽しむ
ことができた。

「サイツコー!!」

「せやな!また来たいなー!」

「うん!」

今日は来てよかったとハルカは思う。いつもケンカばかりだった
が、こんなふうに普通に話すことができると知れたから。

「おーい!ハールカー!!」

この変なデートを企てた人の1人、衣里がエントランス前で手を
振っている。その隣にはもりしーもいる。

「どうだった?楽しかった?」

「おかげさまで。いっぱい絶叫乗れましたよ」

皮肉たっぷりで言ったやつたつもりなのだが、衣里は嬉しそうに
ハルカに耳打ちをしてくる。

「正直こうしようって思ったのは、立花が高橋をあきらめたハルカ
を心配してたからだよ。素直じゃないから言わないけどね」

へー・・・立花がそんなことをね・・・

不思議な気持ちでユウを見ると、彼はもりしーと菅原に頭をなで
なでとされてからかわれている。その顔は真っ赤だ。

今日は来てよかった。ハル力は心からそう思った。

第6回 意外な一面（後書き）

一応予定では、高校卒業後まで書くつもりです。
どうか時々でもいいので、読んでくださると嬉しいです。

第7回 恋したい

早かった夏休みが明けると同時に、1つのニュースが飛び込んできた。

「えええっ！！菅原とつきあうことになったー！？」

立花悠と宮崎衣里（みやざき）の声が同時に重なって朝の廊下に響き渡る。

それとは対照的に、小山亜美が人差し指を立てて慌ててしーっと制している。

「声が大きいよー・・・誰かに聞こえちゃうよー・・・」

「いつから！？」

わくわくとして尋ねると、亜美は真っ赤になって顔を両手で押さえている。

「ほんとに最近だよ・・・？ハゲシマ行ってから話すようになって、それから・・・私もいいなって思うようになって・・・こないだつきあわないかって言われた・・・」

「よかったじゃーん！おめでとー！」

衣里も自分のことのように喜んでいいる。

「でっでもね・・・」

亜美が何か言いかけたとき、ちょうど廊下の向こうから今登校してきたばかりの男子3人組と目が合った。

森下和樹と衣里。

菅原翔太と亜美。

立花悠（ゆう）とハルカの視線が絡み合い、

「なんや俺らだけのけもんやんけー！」

「すっごいむなしくなってきた・・・」

ハルカとユウがぎゃーぎゃー騒いでいると、仲良く話そうとして

いた衣里ともしーがようやく2人の相手をする。

「うるさいなー。今いいとこなんだからちよつと静かにしててよ」

さすがに何も言い返せなくなつてしまい、助け舟を求めて亜美を見たが、そこでは彼女と菅原が初々しくお互いにおはようと言いつている姿があつた。

おまけに、廊下の向こう側から高橋が同じクラスの女子と仲良く話しているのが見える。

なんか・・・乗り遅れてる？

「あーあ・・・恋したいなあ」

誰に言うでもなくハルカはひとり言を言つてみる。

しかし、すぐ傍にいた衣里に突つ込まれてしまった。

「何言つてんの。ハルカには立花君がいるじゃん」

「やめてよー。そんなん考えたことないしー、考えられないし」

窓の外を見れば、バスケット部が活動しているのが見える。今日は外での活動らしい。

隣ではサッカー部が活動している。そういえばサッカー部にかっこいい人がいると聞いたことがある。

気がつけば、親友2人はすでに彼氏ができている。

ハルカはまだ両想いというものを体験したことがなかった。

「もうすぐ文化祭だし、なんかいい出会いがあるかもよ？」

「文化祭？」

「ほらほら、この干物女に亜美ちゃんも何か言つてやってよ」

今まで黙っていた亜美に話を振ると、亜美は今初めて気がついたようなリアクションでえっと驚いた。

「ごっごめん・・・！聞いてなかった」

「どうしたの？亜美ちゃん。せっかく彼氏とラブラブなのにー」

だけど、衣里の言葉に、亜美はただ笑っただけだった。

その頃、部活の休憩の時間、ユウは水道で顔を洗っていると、隣の蛇口を使う誰かに気づいた。

「あ・・・高橋」

彼も陸上部の休憩中らしい。肩にかけたタオルで汗を拭いている。

「よっ！もう怪我は治ったか？」

「とつくの昔に治ったで。まっ俺にかかりゃ、あんなもん屁へでもないわ」

「そーかい。そりゃよかった」

軽く聞き流して、高橋は顔を洗い始める。

それを見て、ユウは何か様子がおかしいことに気づいた。

「なー、立花」

「――？なんやねん」

「お前、好きなやついるか？」

「なにっ！お前、俺のこと好きなんか！？」

「違うから」

ついノリで受け答えしてしまったが、ユウはとにかく質問の内容を頭の中で繰り返した。

そこでようやく何を言われたのか理解する。

ユウはあんまりこういう話は得意ではなかったが、高橋になら話

してもいいような気がした。

「まあ、好きなやつちゅーか、前の学校でつきおうてる人はいた。自然消滅やったけどな」

「へえ・・・」

「せやけど、もっぺん会ったらきつと好きになるわ」

少し照れながら答えた言葉は、だんだん色づき始めた秋の空に消えた。

第8回 懐かしの再会

ぎーこぎーこぎー……

小刻みに聞こえていた音が急に聞こえなくなる。それに気づいた小山衣里が慌てて、

「ハルカ！手え切るから！」

「ふえー……わあっ……！」

間一髪のところでは立花悠^{はるか}は大怪我を免れた。

手元には、文化祭で使うはずの看板を作るため、のこぎりが握られていた。

「寝てた？また？」

「だって課題が終わわないんだもん。ちょーっと赤点取ったくらいで、ゴリオのやついっぱい課題出してきてさー」

その提出日があと5日となった今日、それと同時に文化祭が待ち構えていた。

ちなみに、中間テストでの赤点であり、この学校では課題をやつて再テストを受けないと、下手をすれば進級できないことがある。

なんでこんなことになったんだろ……

少しだけ考えてみて、ようやく自分が『31』という洋画のドラマにハマリ、ずっとレンタルして見ていたことを思い出す。

「なんや。2号も課題かい」

いきなり頭上から声が降りかかってきた。見上げると、同じ課題を持っている立花悠^{ゆう}の姿があった。

一瞬むっとしたが、とにかく平静を装う。

「一緒にしないでくれる？私はたまたまテストの日に調子が悪かつ

ただけなんだから」

「俺かてあの日はたまたま頭が痛^{いと}うて、それどころじゃなかったん」
「だーから、一緒にしないでよ!」

「ちやうわ!お前かてマネしてんのとちやうか!？」

「うるさい!!」

その声と共にばしーんとノートの角が頭に当たって、地味に痛みを感じた。

「赤点だったことに変わりはないんだから」

きつぱりと衣里に言い放たれ、2人はこれ以上何も言えなくなっていました。

結局、文化祭の準備をしている間中、ハル力は課題に追われることになった。

ゴリオに呼び出されて、1人準備に参加せずに延々と課題をやりに続ける日々。

しかも、ユウが課題を早々に終わらせていることがまた気に入らない。

そして、高校2年生の1度しかない文化祭の苦労や楽しみを一切経験することなく、本番当日を迎えた。

「苦労や楽しみみて・・・うちのクラス、ただ学校の看板とか作っただけじゃん。それまでは大変だったけど、本番は1日中見て回れるし、別にクラスの結束力高まるようなことじゃないと思うけど・・・」

なにかあきれたように衣里は言う。それでもハル力はぶーぶーとぶーたれるしかなかった。

「ハルカちゃん、衣里ちゃん！」

「ん？どうしたの、亜美ちゃん」

亜美は手を前で組んで、言いくそうに顔をしかめている。

ようやく喋りだしたときには、なんだかすごい時間がかかったように思えた。

「私・・・これから菅原君と一緒に回ってきていいかなあ・・・」

「もっちらーん！行つといでよー！」

「後でなんかおごつてよー」

口々にかかわれて、亜美は顔を真っ赤にしている。

しかし、その表情が一瞬曇ったように見えたのは気のせいだろうか。

「そついえば、衣里はいいの？もりしーと一緒に回らなくても」

疑問に思ったことをハルカが口にする、衣里は苦笑して手を振る。

「もりしーのクラス、本番結構忙しいんだって。だから、遊びに行くことしかできなくてさ」

「あーそっかあ」

「それに、私もいなくなったら、ハルカが悲しむと思って」

「別に？」

「よーっす」

振り返ると、たこ焼きを食べながら歩いているユウと、高橋がいる。

彼らのおかげでハルカは衣里のチョップをくらわずに済んだ。

「あつ！たこ焼きだあ」

「ええやろー。立花にはやらんけどな」

「ほしいなんて言っていないから！」

いつものようにこのままエンドレスの口ゲンカが始まると思って、仕方なく衣里が仲裁に入ろうとしたそのときだった。

「ユウ！」

どこかイントネーションの異なる女の子の声が聞こえてきた。声のした方、私服姿の女の子2人組みがそこにいた。ボーイッシュな女の子と、おとなしそうなかわいい女の子だった。

しかし、名前を呼ばれたユウは、しばらく反応できずに硬直していた。

黙って2人を見て、あーとかうーとか言って声にならない声を発している。

「びつくりした・・・えっ、なんでここにおるんや？」

「サプライズでびつくりさせたる思たんや。他にもマイケルとかおるんやけど、今トイレ行っててなー」

ボーイッシュな子がにこやかに答えて隣にいたおとなしそうな子を前に押しやる。

「ほら！何照れてんねん。久しぶりに恋人に再会したんやから！」
さすがにその言葉には驚いて、ハルカはユウを見る。彼は首に手を当てていて、その頬は少し赤い。

よくわかった。ユウには彼女がいたということが。

第9回 変な気持ち

立花悠^{ゆう}の彼女の存在は、すぐに2年生の間で広がることになる。

一部の女子は彼女を1度見たいと希望し、わざわざ見に行く人まで現れた。

正直、ハルカはそこまでユウが人気だとは知らなかったなので、今回の騒ぎには驚かされた。

「いいの？ハルカは」

突然の声に驚くと、ちょうど昼ごはんを食べているときだった。どうやら衣里と焼そばを食べている途中らしかった。

「いいって・・・何が？」

なんとなく話の内容には気づいたが、ハルカはわざととぼけてみせる。

気にならないって言ったら嘘になる。

あいつは今まで彼女がいたことなんて一言も言っていなかったのに。っていうか、別に言う必要ないか・・・

ただ、ちよつとだけショックを受けている自分がいた。

そこまで考えて、慌ててハルカは自分の考えを押しやった。

「でも、立花は彼女と自然消滅したと思ってるんだって。なんかわけありみたい」

「ふーん・・・」

気のないふりをするだけで精一杯だった。

その頃、ユウは高校1年生のときにつきあっていた彼女、谷口小^こ

春と一緒に文化祭を見て回っていた。

「なんか食べる？大阪のたこ焼きもうまかったけど、ここのも絶品やで」

「ほんま？じゃあ食べよっかな」

小春はたこ焼きを購入し、その1つを口に入れてすごくおいしそうな表情をした。

それを見て、ユウは昔よく一緒に遊びに行ったことを思い出し、言わなければならないことを改めて痛感した。

「——小春」

ようやく2人きりになれた5組の教室。ユウは決心した。
「なーに？」

「あのときのことなんやけど・・・」

小春は何も答えなかった。正確には、何かを言われる前にユウがまた喋りだしたことが原因しているのだが。

「行かへんかったことは謝る・・・せやけど、俺怖かったんや。

小春にふられんのわかってたから・・・ほんまにごめん」

小春はしばらく何も言わなかった。やがて口を開いたかと思うと、ユウにとつて意外なことを話し出した。

「あのとき、来てつてお願いしたんは・・・ユウ君をふるためじゃない」

「・・・・・・・・え？」

「あの日が何の日やったんか、ほんまに覚えてないん？」

小春の言葉に、最初に思ったのは誕生日だったが、それは違う。

3月・・・？何かあったっけか？

「やっぱ忘れてる・・・つきあってちょうど1年たったこと」

「あ・・・・・・・・」

「ふられたと思ったんは私のほうなん」
小春が微かに笑ったのを見て、ユウは何も言えなくなっていました。

「もう1度やり直せんかな・・・私たち」
それが小春の精一杯の告白だと知った。

頭の中でいろいろなことを考えた。でも、何も考えていないような気もする。

ユウは返事をしようとした・・・そのときだった。

「あのー・・・」

どこからか声が聞こえてきて、2人は心臓が飛び出すほど驚いた。よく見ると、教室の隅のほうになぜかハルカがいるのだ。

「立花・・・！？なんでここにおるんや！？」

「人聞きが悪いなあ。さつきからずっといたよ。あんたが後から入ってきて勝手に喋りだしたただだよ」

ハルカは心底迷惑そうに言い放った。

最悪。なんでこんな場面に出くわすんだろう。

課題を終わらせるために、誰もいない教室を使ってやろうと思っていたのに、急にユウたちが入ってきて、しかもこっちの存在に気がつかないで深刻な話をし出してしまった。

さすがにあれ以上は聞いちゃいけないと思い、こうして声をかけてみた。

「なにしとんねん・・・」

「課題だよ。でも、もう終わるから私文化祭回ってくるね。続きはこゆっくり」

とにかくダッシュでこの場から逃げ出したかった。
顔も見れなかった。

自分が邪魔者だということだけはわかった。

なんだかおかしい。自分が自分じゃないみたい。

「ハルカちゃん！」

行く当てもなく走っていると、菅原と一緒にいる亜美に会った。
なんとなくほっとしてハルカは笑顔で近づく。

「2人とも今からどこ行くの？」

ハルカとしては何気ない質問のつもりだったが、亜美は急にしゅんと暗くなってしまった。

「ど、どうしたの？」

「立花さん」

答えたのは菅原だった。あまり喋ったことがないので、菅原からさん付けで呼ばれるのは新鮮だとそのときはのんきなことしか思えなかった。

「俺、今日で転校することになったんだ」

一瞬、何を言われているのかわからなかった。

しかし、亜美の顔色を見る限り、冗談で言っているわけではなさそうだった。

「な・・・なんで？そんなの聞いてない・・・」

「ごめん。ゴリオには誰にも言うなって頼んだから・・・これから空港に行く」

ようやくわかった。ここ最近亜美の元気がなかった原因が。

——菅原が遠くに行く。

第10回 遠距離恋愛

菅原翔太の話を聞いて、衣里、もりしー、ハルカ、亜美が食堂に集まった。

「一言ぐらい言えよ」

いつもにこやかに話すもりしーこと、森下和樹が静かに言い放つ。
「クラスは違ったけど、俺は菅原の友達のつもりでいたんだけど」
「悪い。俺みたいなのやつ、別にいなくなっただって誰も困らないだろうと思うて」

たぶん本心でそう言っているのだろう。それが余計に辛かった。

「菅原、本気でそう言ったんなら、今すぐ小山さんに謝れよ。誰よりもお前の転校を悲しんでんだから」

もりしーの言葉で、とうとう小山亜美は泣き出してしまった。

思い返せば、菅原は亜美とつきあうまでは学校も休みがちだった。しかし、つきあいだしてから1度も休んだところを見たことがない。たった2ヶ月とちよつとの短い時間だったが、2人にとってはとても大切な時間だっただろう。

「小山……ごめん、俺……」

「やだ………笑って見送ろうと思ったのに……」

亜美のその様子が、見ていて辛かった。

しばらくして、1人の男子生徒が慌ただしく食堂に入ってきた。

「立花」

最初にもりしーが気がついて、こっちに来るように手招きする。
彼女は一緒ではないらしく、どこから走ってきたのかずいぶんと息が荒い。

「今メール見た。ほんまなん・・・菅原が転校するっちゅうんは・・・」

「うん。悪い、言わなくて」

菅原はこの日何度目になるのかわからない言葉を口にする。

「いや、気持ちはわかるで。俺かて、自分転校するとき、誰にも言わんと行くつもりやったし・・・結局担任に言われてしもたけど」
すんと空いているイスにユウは腰掛けた。

ハルカはユウを見ることができなかった。

菅原の転校のことで一時忘れていたが、本人が現れたことでまた思い出してしまった。あの告白のことを。

今はそんなことを考えてる場合じゃないのに。

そう考えていると、菅原がひょいっと立ち上がった。

「じゃ、俺そろそろ行くから」

しかし、みんなが学校前まで見送りに立ち上がろうとするのを彼は制した。

「——ここでいいよ。みんなによろしく言つといて」

そして、みんなの顔を見渡してから、最後に亜美の顔を見た。

「・・・行ってくる」

「うん・・・行つてらっしゃい・・・」

菅原は苦笑して、それからユウともしーに向き直る。

「小山に手を出す男がいたらぶっ飛ばしといて」

「まかせろ」

3人はにっと笑つて、互いの拳をこつんとぶつけ合った。

そうして、菅原は学校を去っていった。

後の文化祭はなんだか物寂しいものになったが、それでも亜美は元気に振舞ってみせる。

それがから元気だということに、ハルカたちは気づいていた。

その日の帰り道、ハルカと衣里と亜美が並んで帰る中、亜美はぽつりと呟いた。

「私・・・菅原君とつきあう前は、好きな人が遠くに行っちゃっても平気だと思ってたの」

ハルカと衣里は黙って亜美を見る。

「だけど、違うんだね。いつもいつもその人のことを考えちゃって、ずっと一緒にいたくなって、離れることがこんなに辛いことだったなんて思わなかった・・・」

そのとき、ハルカは自分の心境を考えていた。

今亜美が言ったことを、ハルカも思っていたのだ。ずっとその人のことを考えて、一緒にいたくて、どこにも行ってほしくなくて・・・

「それが恋だよ」

衣里の一言にハルカは驚いた。

まさかそんなわけがない。ハルカは必死にそれを否定した。自分がユウに恋しているかもしれないということを――・・・

絶対ありえない。

絶対。

第11回 サンタがやって来ない（前書き）

「サンタが街にやってくる」を

思い出しながら読んでくださると嬉しいです。

第11回 サンタがやって来ない

サンタクロースが街にやってくる。

この歌を聞いて、去年までの自分だったらきつと気分はクリスマスになるだろう。

だけど今年、立花悠はるかのテンションはそんなものではなかった。

「ねえねえ、これかわいくない？」

衣里と2人だけで買い物に行っている途中、かわいいマフラーを見て衣里が尋ねてくる。BGMには『サンタが街にやってくる』がかかっている。

「いいと思うよ。白だし、どんな服にでも合うと思う」

「だーよねっ！クリスマスにこれ巻いてこうかなあ」

クリスマス。その響きにハルカはどきつとした。

「ハルカはどうするの？クリスマス」

「・・・家で特番見る」

その一言で、一瞬にして自分の周りの空気が5度くらい下がったような気がした。

「待って、ハルカちゃん！世の中もつと楽しいことがあるはずだよ・

」

「だって相手がいないんだもん」

言った後、ハルカはしまったと思った。そして、案の定衣里はこういう話をし出した。

「立花は？そういえば最近あんまり話してないみたいだけど・・・」
そう。文化祭が終わった辺りから、ハルカはユウとちゃんと会話した覚えがない。

もし話したら絶対気になってしまう。彼女とまたつきあっている

のかがどうか。

「ちなみに、ハルカが立花に告ってふられたって噂があるんだけど」
「はあ？そんなわけないじゃん！」

むしろそんなことはありえないとハルカは必死に否定した。
そうすることで、自分の気持ちを押さえ込もうとしていたのかも
しれない。

サンタが街にやってくる。ハルカのもとには来ないような気がしてきた。

サンタがやってくる代わりに、ハルカのもとに来たのは、両親からのとっておきのプレゼントだった。

「はあっ！？家庭教師い！？」

「そう。あんたの成績が伸びるように、ちょっと奮発しちゃった」
だったらもつと別のことに奮発してほしかった。

ピンポーン

まるでタイミングを見計らったかのように誰かがやって来た。

「はい」

母が出て行く。その隙にハルカは自分の部屋に逃げていく。

だけど、家庭教師からは逃げられない。

そのうちに部屋のドアがノックされ、返事するよりも先にドアが開かれた。

「はじめまして。これから家庭教師をさせていただく広瀬です」
予想に反して背の高い、それもかなりイケメンな男だった。

しかし、ハルカがムスツとして答えないので、家庭教師は少しうろたえていた。

「担当は数学だけど、他の教科も一応できるから、なんでも聞いてください」

その日のハルカは後で思っても、とにかく機嫌が悪かった。

1番その被害を受けたのは広瀬かもしれない。本人が言うのもなんだが、かなりハルカはぶっきらぼうに答えてしまい、広瀬がかわいそうだと思った。

それくらいムスツとしていたのだ。

そして、何もイベントのないクリスマスがやって来た。

クリスマスイブは学校が休みだったが、クリスマスは補講があった。だから、衣里や亜美が遊びに行くのはクリスマスイブだろう。

1人身のハルカはイブの日、行くあてもなくショッピングセンターを歩いていた。

午後から家庭教師が来る。それまでに帰らないといけない・・・と考えているとき、ちょうど本屋で見知った横顔を見つけた。

「広瀬先生・・・？」

その声は小さすぎて聞こえなかったが、間違いようがなかった。しかし、広瀬がいる場所が気になる。そこには、高校生用のセンター試験の問題集があった。

なんでこんな所にいるんだろ・・・まさか、生徒の勉強のため？
「あっ・・・」

目が合ったのは突然だった。広瀬がこっちを見て驚いたような顔

をしている。

「ハルカちゃん？えっ・・・なんでここにいるの？」

「先生こそ・・・」

「えっと・・・初めての家庭教師だし、とにかく勉強しないと
って思ってた・・・」

しかし、そのとき唐突にハルカは理解した。広瀬がハルカのために
センター試験の問題集を買おうとしていることに。

それがわかった瞬間、どうしようもない感情を覚えた。

「クリスマスイブに勉強なんて、普通嫌だろうけど・・・」
「ううん」

そのとき、ハルカは久しぶりにっこりと笑った。

もちろん勉強は嫌だったが、こんなにすっきりとした気持ちにな
ったのは久しぶりだった。

第12回 最低な時

クリスマススイブ。

立花悠^{ゆう}はシヨップینگセンターの書店で立花悠^{はるか}の姿を見た。

それも、かなり男前で背の高い男と一緒に歩いているところを見てしまった。

「あいつ・・・彼氏おったんかい・・・」

思わずひとり言がもれた。

翌朝、ハルカが登校すると、珍しく遅刻してこなかったらしくユウと下駄箱で会った。

文化祭の一見以来ともに会話していなかったので、一瞬話題に困っていると、意外にも向こうから挨拶してきた。

「おっす」

「・・・おはよう」

たったこれだけのことなのに、ハルカはときどきするほど嬉しさを感じている自分に気づいた。

それと同時に、こつちを怪訝そうな表情で見ているユウの視線にも気づいた。

「なによ」

「別に・・・あんさあ、昨日どっか行っただけ？」

今度はハルカが疑問に思う番だった。

「シヨップینگセンターには行っただけ・・・なんでそんなこと訊くの？」

「や、それっぽい人見かけてな・・・1人で行ったん？」
「うん。そうだけど・・・」

このときのハルカは、まさか自分が試されているなんて思いもしなかった。

だから、その後ユウが「ほな、先行くわ」とか言っ行ってこうとするので、慌てて後を追いかけていった。

「ねえ！あんたも昨日ショッピングセンターに行ったの？」

ハルカとしては当然の質問のつもりだったが、いきなりきつとユウに睨まれてしまった。

「そんなんお前に関係ないやろ！」

なんでそんなふうに言われなければならないのかわからず、ユウの怒声にハルカはぶちつときれた。

「なにさ！あんただって似たようなこと訊いてきたんでしょが！」

「それとこれとは話が別や！」

「別じゃないよ！」

売り言葉に買い言葉。思わずユウの腕を引っ張ると、そのままユウが後ろにばたんと倒れてきた。

げっ・・・そんなに強く引っ張ったつもりなのに。

慌てて手を貸そうと伸ばしたが、ユウはそれを無視してまたまたじとつと見てくる。

「言いたいことがあるんだっつらばつきり言ってよ」

「——もうええわ。俺が悪かった」

さらに腹が立つことを言われ、久しぶりの会話は強制的に終了した。

「~~~~なんなのアイツ！超ムカツクんですけど・・・」

「私は超ハッピーだよ。昨日もりしーとラブラブデートしてきたもん。亜美ちゃんは？」

「わっ私も。菅原君と遊びに行っただよ」

ハルカと衣里と亜美の会話はバラバラに見えるが、正確にはハルカの意見だけ無視されているだけだ。

それが面白い。

目の前の2人はクリスマススイブに彼氏とラブラブに過ごせたということが。

「ハルカも立花君に告っちゃえばいいのに」

「なんで告んの。好きでもなんでもないのに」

そう言ったとき、教室に男子の集団が入ってくるのが見えた。その中心となっているユウの姿を見て、ますます朝のことが気に入らなくなってきた。

と、そのとき男子の1人が教室中に響く声で話し始めた。

「なーみんな！もしこの後暇だったら、みんなでカラオケ行かねー？」

それはどうやらクリスマス会のようだった。2年5組だけで集まるらしい。

「ハルカ、どうする？」

衣里に尋ねられ、ハルカはうーんと悩んだ。行ったら絶対ユウに会うような気がする。どうせまた腹が立つに決まっている。

しかし、それでも予定がないことだけは否定できなかった。

いつのまにか目がユウを追っていた。

あいかわらず楽しそうに笑っている。やっぱりムカツク。
・・・だけど、だけど、クリスマスだし・・・会いたい。

「行こうかな」

その言葉は自然とハルカの口から漏れた。

第13回 サンタがやって来た

夕方4時を少し回ったとき、ハルカは衣里、亜美と一緒に高校近くのカラオケボックスにやって来た。

すでに2年5組の面々は来ていて、ハルカはそこにユウがいるのを見つけた。

「よっし！これで全員だな」

このクリスマス会を仕切る服部が全員来たことを確認して、立ち上がる。

「とにかくー・・・今日という日を迎えられたことに感謝して——」

「ほなカンパーイ！！」

横からユウが言葉を奪い、服部が固まっている間にみんなは乾杯をしてしまった。

プレゼントはあみだくじで適当に決めて、渡す相手を決めるらしい。

ハルカは密かに、ユウにプレゼントが渡せるようにと願ってくじに自分の名前を書いたが、その結果は——・・・

「はい！プレゼント」

「え？私も服部君にプレゼントあげるんだよ？」

「マジで？俺ら物々交換じゃん」

服部はにこにこ笑いながら、プレゼントを開けて喜ぶ。

服部がくれたものはペンケースと、有名アパレルショップの20パーセントオフ券だった。

もちろん嬉しい。

だけど、無意識にハルカはユウの姿を捜してしまった。
どうやら彼は衣里にプレゼントをあげることになったらしい。相
手に少し安心しながら、あみだくじで衣里のところに名前を書けば
よかったと後悔した。

クリスマス会は続いていく。

クラスメートが自分の好きな曲を歌って採点し、その点数が1番
高い人が勝ちというゲームになってきている。

今のところ1番高いのは衣里だ。

「ハルカちゃん、調子悪いの？」

クラスメートの歌を聞いているとき、隣にいた亜美にそんなこと
を訊かれた。

「え・・・大丈夫だよ」

「ほんと？なんか顔色が悪いように見えるけど・・・」

そういえば頭が痛い気もする。亜美に言われて初めて気がついた。
亜美がハルカのおでこに手のひらを当ててみると、

「わっ・・・あっついよ！熱あるかもしれない・・・」

「ほんとだー。ハルカ、ちょっと顔色が悪いよ」

ジューズを持って戻ってきた衣里も心配そうな表情で言ってくる。
ハルカもだんだん熱っぽさを感じるようになってきた。

「ちょっと頭痛いかも・・・今日はもう帰ろっかな」

「そうだね。服部君には私から言っとくよ」

ハルカはこくんと頷いて、よろよろと立ち上がった。

結局、ユウと話すことができなくて何のために来たのかわからないクリスマスだった。

今日来てみて、わかったことが1つだけある。自分はユウを意識しているということだ。

「なんで好きになっちゃったんだろー……」

その言葉は、12月の空に白い息と共に消えた。

自分にとって辛いことにしかない恋。

相手には彼女がいる。

決して叶わない恋。

辛い……だけだ。

「立花！」

物思いにふけっていて、最初は気づかなかった。しかし、何気なく振り向いてみて、ようやく気がついた。

「なんで……？」

そこにユウがいたということに。走ってきたらしく、息が荒い。

「宮崎さんに聞いた。なんや調子悪そうだったから、送ってほしいーって」

「ああ……そうなんだ。でも、家近いし、大丈夫だよ」

素直になれずにそのまま帰ろうとしたが、ユウは走って隣に並ぶ。

「送ってく」

「……うん……」

少しだけ緊張してきた。

特に話題があるわけではなかった。だけど、ハルカにとってはこれ以上ない幸せな時間だった。

以前は普通に話せていたのに、そんな当たり前のことがもうでき

なくなっている。

「ここでいいよ。ありがとね」

「ええよ。気にしんな」

自分から言っておいてなんだが、ハル力はこのままユウと一緒にいたかった。

「ほな・・・」

だけど、ユウはあっさりと帰ろうとする。あきらめてハル力も家に向かおうとする・・・そのときだ。

「立花ハル力！」

振り返ると同時に、ハル力は何かが飛んでくるのを見た。反射神経でそれを取ると、

「朝怒鳴った詫^わびや」

そのままダッシュでユウは走っていつてしまった。

サンタが街にやって来た。ハル力のもとにもやって来た。もらった『31』のキーホルダーをずっと大事にしようと決めた。

第13回 サンタがやって来た（後書き）

『31』とは、ハルカが文化祭のときに課題よりも優先して見ていた洋画の題名です。どうしてもいい設定ですが……

第14回 一発逆転？

年が明けた。

年末年始はあつというまに過ぎていき、気がつけば冬休みも終わってしまった……ということに気がついたのは、始業式の朝だった。

「やっばい！遅刻だー！！」

朝ごはんもろくに食べずに、立花悠^{はるか}は家を飛び出す。自転車にまたがり、今までにないスピードで学校へと向かう。

せつかく今年1年は品行良性に過ごそうと思っていたのに、最初の登校から遅刻だなんてなんとしても避けたい。

しかし、どうやらハルカだけでは足りないらしい。

猛スピードで下駄箱まで走ると、先に靴を脱いでいる人影を見つけた。

「あれっ？立花……？」

「おーっす。なんや、今登校かいな」

「あんただってそうでしょ。やばい……話してる時間もないし」
急いで靴を脱ぐと、先に立花悠^{ゆう}が走り出す。

「ちよつとー！レディーを置いていく気？」

「誰がレディーやねん！1番最後にはなりたないしな！先行くわ」
ハルカも急いでユウを追いかける。

追いつけないと思っていたのに、意外にも早く追いついたのは、ユウが手加減して走ってくれたからなのかもしれない。

しかし、教室に入る頃にはどっちが先に入るかでぎゃーぎゃーと揉^もめてしまったが。

「ちやうねん！俺のほうが先に来とつてん！無実や！」

「でも、先に教室に入ったのは私です。だから……」

「掃除当番は最後の立花（さん・君）にやらせてください」

遅刻に対する言い訳に、担任のゴリオは一言呟いた。

「お前らどっちも教室掃除しとけ……」

「ウケる〜！結局どっちも掃除当番じゃん」

この話を聞いた宮崎衣里はげらげらと笑い出した。亜美はどうすることもできずにただおろおろとしている。

「なんかいつのまにか文化祭の前みたいになってるよね。ずっと気になってたんだけど、クリスマスの後なんかあったの？」

ハル力はぎくつとして黙り込む。

一言で言えば、その答えはノーだ。ただその日の朝に怒鳴ってしまったお詫びにプレゼントをくれたわけで、クリスマスプレゼントというわけではない。

だけど、ハル力はユウが好きだと改めて思ってしまった。

「ああ。言っとくけど私たち、もうハル力が立花君のこと好きなの知ってるからね」

「ちっ違っよ！」

慌てて否定したが、衣里はにやりと笑い、亜美は困ったように笑っている。本当のようだ。

「なんとなく見ててそうかなーって思ったの。きっと立花君もハル力ちゃんのこと好きなんだと思う」

「そんなわけないよ……あいつ彼女いるし……」

衣里の言葉に否定しながら、自分にどん底に落とす言葉を言ってしまった。

文化祭の後から、結局ユウの彼女の話はなくなってしまった。だけど、ハル力は知っている。彼女からまたやり直したいと言われたことを。

その返事をどうしたのか知りたかった。

「ここは一発逆転だよ！」

衣里が持っていた雑誌をどんつと机の上に置く。そこにはバレンタイン特集が載っていた。

「チョコをあげるのさ・・・」

「やだよ！チョコなんてあげたことないから！」

「ちようどいいじゃん。立花君が初めてってことで」

「無理だよ！そんなしたら向こうだって気づいちゃうじゃん」

ようやく今までの関係に戻れたのに、ハル力はそれが崩れることをなによりも恐れていた。

それに気づいたのか、衣里はちえーつと雑誌を取り上げる。

「ハルカー、このままでいいの？」

その質問に答えることができなかった。

このままでいいの？という質問に、ハル力の答えは2つある。

1つはイエス。せつかく以前のように話せるようになったのに、これ以上関係がこじれるのは嫌だ。

もう1つはノー。好きな人ができたら、誰だってもっと仲良くなりたいと思うんじゃないだろうか。

その日は家庭教師の広瀬が来る日で、勉強中ハル力は男の意見をそれとなく訊いてみることにした。

「ねえ、先生は好きでもない女の子からチョコもらえるのって嬉しいかったりするんですか？」

「え？なに急に」

広瀬は少し驚いていたが、それでも真剣に考えてくれた。

「そりゃぁ嬉しいよ。俺甘いもの好きだし、手作りとかだと余計嬉しいかな」

男の人ってそういうものなんだ・・・

ハルカはそう考えて、カレンダーを眺める。2月14日、バレンタインデー。

先生にチョコをあげるついでなら・・・ついで、うん、いいで！

ハルカはチョコを作ることを決心した。

第15回 バレンタインデー

バレンタインデーの前の晩、衣里の家でチョコレートを作り上げた。

ハルカは広瀬の分と、そのついでにユウの分。衣里はもりしーの分。亜美は遠くにいる菅原のためにチョコではなく帽子を編んだ。

「ついでねえ・・・」

衣里にじとつと睨まれたが、ハルカはあくまでも家庭教師の広瀬へのチョコを作るついでとしてユウのチョコを作っているのだ。

そうとでも言わないと、からかわれることがわかっていているからなのだが。

とにかく、チョコは完成した。

あとはこれをユウが受け取ってくれるかどうかだ。

とは思ったものの、いざとなったらどうやって渡せばいいのかわからない。

堂々とチョコを渡せば、これは本命だと言っているようなものだ。そんな恥ずかしいことはできない。

それなら下駄箱に入れてみる？でも、それこそハルカがやったとわかれば恥ずかしさが勝る。

衣里は素直に隣のクラスに行き、堂々と廊下で渡していた。

「はい、もりしー！頑張って作ったんだよー！」

「わあっ！すごいき嬉しい。ありがとう」

これほど素直なカップルもないだろう。

ハルカは亜美と一緒にそれを見ながら、かぁーっと照れていた。

と、そのとき他の男子と話しながら廊下に出てくるユウを見つけた。

まだこっちの存在に気づいておらず、誰か女の人に話しかけられ、どこかに行ってしまった。

急に胸騒ぎを覚えた。

「あ・・・これで2個目かな」

もりしーが呟く。

「どういう意味？」

「朝、下駄箱にチョコが1個入ってたんだ。俺の知る限り、これで2個目」

結局渡せないまま帰りの時間になってしまった。

「ハルカ、このままでいいのー？」

衣里の質問に、ハルカは俯くしかなかった。

「立花君、今職員室に呼ばれてったよ」

まるでこれがチャンスだよと言わんばかりの言葉だった。

こくと頷いて、ハルカは飛び出す。

せっかく作ったのだから、どんな形でもいいから渡したい。ただそれだけだった。

しかし、廊下を走り続けて、曲がり角で誰かとぶつかってしまった。

「わっ・・・！」

その拍子に持っていたバッグの中のものがぶちまけられた。

教科書、ノート、それから渡そうと思っていたチョコレートの箱も。

ハル力はそのぶつかつた相手がいるとわかるとすぐに落ちたチョコを拾い上げて、そのまま相手に押し付けた。

「つつつつ!? なんやねん!？」

「いいから!！」

後で思ってもなんて強引な渡し方だつたんだろうと思う。だけど、それが精一杯だつたんだ。

それから、すぐに立ち去ろうとした……

「立花! 待てって」

ぐいつと腕を掴まれて、ハル力は驚いて振り返る。それと同時に、渡したはずのチョコを押し付けられてしまった。

「受け取れん。これは……あかん」

「なっなんでよ」

聞きたくないのに、思わず声に出してしまった。

「あかんよ。こーゆーのはほんまに好きなやつに渡すんやで」

にっこりと笑ってそう言われると、ショックを通り越してあきれってしまった。

「もういいよ……立花なんて畑の肥やしにでもなつとけー!

」

「はあ!? 意味わつかんねーし!」

そう言つたタユウの顔面めがけて思いっきりチョコを投げつけた。地味に痛そうだった。

「黙って受け取つとけ!」

それが決めゼリフ。

もう何も言われないように、ハル力は全速力で駆け出した。

翌日の気持ちはとにかく重かった。

まずユウに会いたくなかった。衣里に昨日のことを話すと、馬鹿だと笑われてしまった。

そして、そういうときに限って朝一番に会ったりする。

「よお。昨日はどうも」

ユウの開口一番がそれだった。ハルカは目をそらして挨拶を返す。

「だーれかさんのせいで、なんや鼻が痛いんですけど」

「なんのことやらさっぱりですが」

「ごによごによと呟くと、通り過ぎる際にユウが一言呟いた。

「チョコ、うまかった。さんきゅ」

たったそれだけでなんでこんなに嬉しくなったんだろう……

第16回 修学旅行の始まり

早いもので、もうすぐ3年生になる。

そのことを立花悠^{はるか}が実感したのは、広瀬との勉強の最中だった。

「えっ？第一志望？」

「うん。ハル力ちゃんの志望校、そろそろ決まったかなって思ってた。例えば広瀬が家庭教師に就き始めて4ヶ月、最初の月に志望校を訊かれたとき以来、一切話していないことに気づいた。

志望校か・・・正直なんにも考えてなかった。

「すぐに決めなくても大丈夫だよ。とりあえず、お母さんから大学に行きたいって聞いてるけど」

ハル力はこくと頷いた。両親が共に大学に行けなかったので、せめて自分の子供にだけは行かせたいという思いがあるらしい。

「広瀬先生の大学ってどこなんですか？」

「C大学」

それは県内でもトップクラスに入る大学だった。

志望校。それを決め始めるということは、もう自分が受験生に近づいているということだ。

他の人はどうするんだろうか。

ハル力は無意識に立花悠^{ゆう}がどこに行きたいのか考えてしまった。

そして、春休み。この期間にある大きなイベントといったら、修学旅行がある。

行き先はなんと韓国のソウルだ。

飛行機でだいたい2時間半で着くそれは、高校で1番大きなイベントと言えるかもしれない。

海外に行ったことのない人間がソウルの空港に着いてみて最初にハングル文字を見たとき、

「「アンニョンハセヨー!!」」

そのとき、ハルカとユウの声が重なった。

「マネしないでよ!」

「してへんわ!俺は現地の人とコミュニケーションを取ろうとだなあ・・・」

「はいはい。2人とも恥ずかしいから早く歩こうね」

衣里に言われてはっとして黙り込む。

とにかく高校最大のイベント。これはしまなきや損だ!

「はあ?告白?」

「そうだよ。6組の太田さんが立花君に告るんだって」

一瞬衣里に告白しろと言われているのかと思っ**て**びっくりしたが、一拍遅れてハルカは話の内容に気づいた。

「ハルカ、いいの?太田さんっていったら、巨乳で有名だよ?」

「巨乳関係ないじゃん。それに・・・」

ユウなら巨乳に惹かれないと言おうとしたのだが、そうとも言**い**切れないことに思い当たった。

「そうじゃなくて・・・ハルカちゃんは嫌じゃないの?」

亜美に言われて、正直に嫌だと思った。

「でもね〜わざわざ韓国で本当に告んの?」

「普段と環境が違うからチャンスなんだよ!ハルカもね!」

「は?」

「うまく2人きりになれるようにしてあげるよ!」

別にいいよと言おうとしたところで、ゴリオの集合がかかってしまい、仕方なくこの話は後ですることにした。

修学旅行の1日目は、クラスでの団体行動で世界遺産をバスで巡った。

そして、今日は2日目。明洞^{ミョンドン}で自由行動だった。明洞は若者が多く集まる場所であり、実は日本語も結構通じたりする。

ハルカは衣里、亜美と3人で回り、アパレルショップ、化粧品店、デパートの免税店に入り、そして今は南大門市場を歩いている。ちなみに、今は南大門は建設中で、その周囲を壁で覆っていた。

「ねえねえ！私、ちょっと韓国のみ見てってもいい？」
賑やかな通りの中、衣里が小さな店に入っているとする。

「私も。頼まれてるんだった」
亜美もそれに続く。ハルカもあとに続くこうとしたとき、急に腕をぐいっと掴まれてしまった。

驚いて振り返ると、そこにはたぶん韓国人だと思われる男性が立っていた。

「カオル！——！」

韓国語で何か言っているが、さっぱりわからなかった。

「えっ？えっ？ス、ストップ！ノーノー！アイアムノットカオル！」

「——？あああ……これは失礼しました。いえ、カオルはよく女装をしましてね、その格好に似ていたものですから」

と、男性はペラペラな日本語で謝る。話によるとカオルは男らしかったが、女装した姿が似ているというのも微妙な話だ。

「私はイ・スオンといます。もしこのような男に会ったら、ぜひここへお電話ください」

そう言ってスオンは一枚の名刺と写真を渡してくる。たぶん日本人だろう。とても端正な顔立ちをしている。

「調べればすぐにわかりますが、カオルはこっちでモデルをやってますね、しかしよくどこかにいなくなってしまっんです。よろしくお願いします」

そこまで言くと、スオンはぺこりと頭を下げ去っていった。

ハルカがカオルと会うのは、それから10分後のことである。

第17回 イベント（前書き）

先日、韓国に個人的に旅行をしてきたので、そのときのことを参考にしていきます。

第17回 イベント

お昼ごはんを食べるために、ハルカたちが立ち寄った店は、なぜ韓国に来てここなのかと疑いたくなるような場所、ドーナツ屋だった。

しかし、そこで思わぬ人と遭遇することになる。

「俺と君ってそんなに似てるかなー？」

顔を上げると、そこにいたのは帽子を目深にかぶり、サングラスをかけた顔のよく見えない男の人だった。

彼は失礼なほどハルカを観察してくる。

「あの、失礼じゃないですか？」

衣里がこここのみんなの言葉を代弁すると、男はごめんごめんと誤り、サングラスを取った。

「桜井薫かあるです。一応こっちではモデルをやってるんだけど、よろしくね」

カオル・・・？その名前を聞いたとき、ハルカはさっき会ったスオンのことを思い出した。

「あっ！もしかして・・・イ・スオンさんが捜してた人って——」

「そう俺。でもまだ連絡しないだね。俺にはやりたいことがあるんだから」

そう言うつと、カオルはしーっと人差し指を立ててケータイを取り出して打ち始める。

ハルカたちはどうすることもできずにただ黙っていた。

「よし！決定！」

ケータイをぱたんと閉じると、カオルは急に立ち上がった。

「君らさ、個人旅行でここに来たの？」

「いえ・・・修学旅行ですけど・・・」

ハル力はおずおずと答える。

「なら自由時間まだあるだろ？ちよつと俺につきあってよ」

その軽い誘いに、ハル力たちは顔をしかめることしかできなかった。

なんせさつき会ったばかりの人に、いきなりどこかへ行こうと言われているのだ。しかも、こんな知らない場所です。

とにかく断ろうとしたときだった。カオルの背後からぬつと人影が現れてそこに立ちはだかった。

「やつばー！スオンさん、最速記録じゃねえ？」

「当たり前です。カオルの行く所なんてだいたい想像がつきます。どうせ俺のことを近くで見ている笑っているだろうから、日本人の女の子を捕まえてカオルに似てるって言ったんです。そうすれば、その子に接触すると思ったから・・・」

「さっすが俺のマネージャー」

スオンはハル力を見て、深々と頭を下げてきた。

「申し訳ございませんでした。こんなことに巻き込んでしまつて」

「いいえ、気にしないでください」

慌ててハル力らは頭を上げるようにスオンを促す。

「お詫びと言つてはなんです、これから時間があればカオルのイベントでも見ていってください。最前列をご用意します」

「イベント？」

「その必要はないよ。もう知り合いのスタイリストに話をつけてある」

カオルはにーつと笑った。

自由時間はまだたっぷりとある。

スオンも来たし、1時間半くらいで終わるからと言われ、渋々行ってみた所は意外にもすぐ近くの広場だった。

「イベントってここですか？」

「そうだよ。君たちのホテルのすぐ近くでしょ」

こうして見てみると、本当に端整で優しい顔立ちをしていると思う。思わずハルカは見惚れてしまうと、急に後ろから誰かに腕を引っ張られてしまった。

「――？」

女の人だった。たぶん韓国語で何か言われているんだろうが、さっぱりわからない。

背後にいたカオルが代わりに会話をし、最後にハルカの背中を押した。

「え？なに？」

「じゃあ俺はもうスタンバイしなきゃだから、20分後にまた会おうね、ハルカ」

「はいっ？」

その頃、ホテルの近くにいた立花悠^{ゆう}は服部たちと一緒に行動していた。

これから南大門まで行くつもりだったのだが、

「なあなあ、なんかあそこでイベントやってるみたいなんだけど、行ってみないか？」

「イベント？なんやおもしろそうやな」

祭りごとが大好きなユウはすぐに反応してそれに賛成する。

それは、どうやら男の人のイベントらしく、ステージを中心にしていたさんの女の人が集まっていた。時々カオルという単語が聞こえてくるので、ひよつとしたら日本人かもしれない。

「見えるかー？立花」

「うー・・・まあなんとか」

「見えないなら俺が肩車してやろうか」

「いらんお世話じゃ！」

158センチが怒鳴る。見えないのは事実だが、特別見たいわけでもなかった。

しかし、

「おい、あれ立花さんたちじゃない？あと、宮崎さんと、小山さん」
服部の言葉に反応して、ユウは精一杯背伸びしてステージを見る。
そして、そのまま固まってしまった。

本当にいたのだ。ドレスを着た衣里と、亜美と、それからハルカが――・・・

第18回　じれったい

「なにしとんねん・・・あのバカ」

それがステージ上のクラスメート3人を見たユウの感想だった。

しかし、その言葉はたった1人にしか向けられていない。

どうやらそのイベントは新しい飲み物の宣伝らしく、ハル力たちはそれを配る係になっているのだ。選ばれた人だけが飲み物を受け取り、中央にいる男と乾杯をして飲む。日本で言う握手会に似ていた。

しかし、その作業もすぐに終わり、韓国語で何を言っているのかわからなかったが、時々ハル力たちのほうを見てにこやかに会話するのがわかった。

「なんか楽しそうだな」

服部が呟いた言葉に、ユウはおもしろくなかった。

「そうかあ？」

しばらくして、服部が意外なことを言い出した。

「お前、立花さんのこと好きなんだろ」

「はあ？」

「みんな言ってるよ。お前らはよくつつきやいいのにつて」

「あんなあ・・・そんなありえへんつて」

ユウは意識的にハル力を視界から外していた。そうしないとまたおもしろくないと思うてしまう。

「でも立花さんはお前のこと好きだろ、たぶん」

「それもないな。あいつ、年上っぽい好きなヤツいるみたいやし」

クリスマスイブのこと、それからバレンタインデーの2個のチョコレートを思い出した。

「しかし、お前モテるな。太田さんといい・・・そういや、立花の彼女はどうした？文化祭のとき俺見たけど」

「だー！もう訊くねん！俺かてどうかしてるんや。けど、どうしようもないねん！」

たぶん服部には通じていないと思われる言葉を吐くと、ユウは完全にステージから視線を外した。

「ありがとう。ほんとに男のスタッフがやる予定だったんだけど、やっぱり舞台には華がないと思ってさ。それでびびっとくる女の子を捜してたんだ」

イベント終了後、カオルは丁寧にお礼を言っ、今日のイベントで配った炭酸飲料水をプレゼントしてくれた。

まさかハルカたちはドレスに着替えさせられるなんて思ってもみなかった。最初がびくついてたが、実際にやってみるとすごく楽しくて時間を忘れてしまった。

ハルカは衣里や亜美と顔を見合わせてから、カオルとスオンにお礼を言った。

「こちらこそありがとうございました。まさか修学旅行でこんなことができるなんて思いませんでした」

「個人旅行で来たときはいつでも連絡してよ。俺が案内するから」カオルがにっこりと笑顔で言う。笑うと幼く見えてかわいい。

帰り際、もう集合時間が近くなってしまったのでそのままホテルに向かおうとすると、カオルが呼びかけてきた。

「ハルカちゃん！」

「え？」

振り返ると、はにかんだように笑うカオルがいた。

「俺、ハルカちゃんに似てるって言われて良かったよ」

「――？」

「近いうちに日本に行くから。そのときは案内してくれない？」

「はいっ！もちろん！」

最後にそれを約束して、ハルカたちは別れた。

集合時間にはまだ30分近くあったが、すでに何人かの人が出て、その中にユウの姿があるのをハルカは見つけた。

「立花君！」

珍しく衣里が話しかけると、こっちに気づいたユウが歩いてくる。

「どしたん？」

「ううん。今日誰と回ったのになって思って。もりしーとは回った？」

「や、服部たちと回った。もりしーは別のクラスやからなあ・・・」

「そうだよな。私も1回も会わなかったし」

衣里はそこまで言うと、辺りを見渡して少し早口で言う。

「ごめん。ちょっとお手洗い行ってくるね」

「私も・・・!!」

亜美も慌ててついていく。

それを見ていてわかった。これが衣里たちの「2人きりにしてあげる」だということだ。

2人きりになった途端、急に静かになったと感じるようになってしまった。

意識しなければなんでもないことなのに、今のハルカは変な風に考えてしまってそれどころではなかった。

どうしよう・・・どうしよう・・・どうしよう・・・！！

「じれったいなあ・・・」

いきなりそんな声が聞こえたかと思うと、すぐ隣にいつのまにいたのか太田が立っていた。彼女は巨乳で、そういえば修学旅行中にユウに告白するという話があった。

「お互い両想いなんだから、つきあっちゃえばいいじゃない・・・」

一瞬自分の気持ちを言われたような気がして恥ずかしくなったが、もう1度ハルカはよく考えてみる。

そして、思った。両想い・・・？

目の前ではハルカと同じような顔をして、こっちを見ているユウの姿があった。

第19回 俺のこと好きなん？（前書き）

ようやく少し動き出します。

第19回 俺のこと好きなん？

ダメだ・・・寝れない。

修学旅行最後の日の夜、ハル力はなかなか寝つけずにいた。

それも昼間のことが気になってしまつて眠れないのだ。

『両想いなんだからつきあっちゃえばいいじゃない』

後で聞いた話だと、どうやら太田はユウに告白してフラれてしまつたらしい。もしかしたらそのときに、ユウがハル力のことが好きなんだと言つたのかなとも考えたが、態度を見てすぐにそれが間違いであることがわかつた。

あいつが自分を好きなんてありえない。だってあいつにはあんなかわいい彼女がいるんだし・・・

そうだ、はつきりしてほしいことは、ユウは彼女がいるのかいないのかということだ。

結局文化祭のときにユウはどのように返事をしたのかわからない。

そこまで考えてみて、ハル力はだんだんあほらしくなつてきた。

明日も早い。こんなことを考えている間にとつと寝よう。そう思つてようやく眠りにつくことができた。

最後の日は、バスでソウル市内を回る。

韓国は日本よりもはるかに車道が広い。多い所では片道8車線あるらしく、反対車線と合わせると16車線もあることになる。

バスは5組と6組で一緒に行動するため、衣里は自然ともししー

と行動するようになった。

そうになると、ユウや服部とも一緒になってしまふ。ハルカと亜美は、彼らと話すようになった。

「2人とも昨日は見たよ。なんかのイベントに参加してるの」

服部の声で、ハルカたちは顔をぼつと赤くした。あんなドレス姿を見られたかと思うとさすがに恥ずかしいのだ。

「なんであそこにいたのかなーって言ってたんだよねー？立花」

急に話を振られたユウは一瞬驚いた顔をする。

「ほんま驚いたでー」

「驚いた？馬子にも衣装でしょ」

少し嬉しくてそう答えると、ユウはそれを無視して亜美にだけ話しかける。

「いやー小山さんとか宮崎さんとかはわかったけど、そういやんやちんちくりんなのが1人おったなー」

「そんなこと言っちゃ、カオルさんに失礼だよ」

ハルカがちんくりんを勝手にカオルにすると、あからさまにユウは不機嫌な顔をした。

「その名前を言うなや」

「はっ？なんでよ」

いつのまにか亜美と服部はその場から非難していて、またいつものように2人の口ゲンカが始まる。

「それは……なんでもや！」

ますます気になる。しかし、ハルカが問いたださそうと思った瞬間、別のことに気づいた。

「やっぱ！鍵どっかに落としてきちゃったー！」

「は？鍵？」

「さっきトイレ行つたからそこかもしれない！先行つて。集合時間までには戻るから」

そう言つて、ハル力はユウの返事も聞かずに駆け出していった。

しかし、鍵はトイレにはなかった。

朝までは確かにポケットの中に入っていたのに、気がついたらそれがなくなっていた。

韓国で鍵をなくしても特に問題はないが、それについているもののほうがハル力にとっては大切なものだった。

「見つかったか？」

気がつくと傍にユウがいた。ハル力は小さく首を振る。

「ええやん。日本に帰つて合鍵作れば」

「そうだけど・・・あれは大切なものの・・・」

「・・・そんな大事なもんつけとつたん？」

「——うん。『31』のキーホルダー・・・」

そこまで言つてようやく自分が無意識に呟いた内容を理解した。それは、クリスマスにユウにもらったキーホルダーのことを言っているのだ。

うわっ・・・恥ずかしい・・・

穴があつたら入りたい心境に陥り、ハル力は自分の顔が赤くなつていくのを感じた。だけど——・・・

「そんなんまた俺がプレゼントしたるわ」

「・・・いいよ。ごめん、なんか気を遣わせちゃって」

「ええつて。それより訊きたいことあんのやけど・・・」

ハル力は顔を上げる。

「俺のこと・・・好きなん？」

そのとき、強い風が2人を覆った。

「ごめん・・・意地悪したわ」

そう言ってちゃりんと音を立ててユウは手の中からハルカの鍵を出してきた。

「——！？それ！どこで？」

「そのベンチャ」

そういえばあそこでさっき休憩したことを思い出した。きっと座ったときに落としてしまったのだろう。

「ほな、行こか」

「う、うん」

ユウがよくわからない。だけど、少しだけユウが照れている様子を見て、なんだか嬉しくなった。

第20回 それぞれの道

「もりしー！ やつと同じクラスになれたね！」

「衣里ちゃん！ これで心置きなく一緒にいられるね」

クラス表の目の前で、人目をはばからずそんな会話をしているバカップル2人。

そして、その隣で他人のふりをしている立花悠はるかと小山亜美。

「ハルカちゃんと一緒のクラスでよかった〜！」

「私もだよ！ 3年間ずっと一緒だね。担任もゴリオだったりして」

「そうみたいだよ。だって3年2組の1番上に中尾って書いてあるもん」

「えっ？ うそ？」

せつかくあのゴリオと離れられると思ったのに、結局この人とも3年間一緒に過ごすことになるらしい。

そして――・・・

「おんなじ名前が2つ並んでると、どっちがどっかわからなくなるな」

今来たばかりの立花悠ゆうは、げろーっと心底嫌そうな顔をしている。

「あら、1号。そんな嬉しそうな顔しなくても」

「誰がやねん。しかも担任ゴリオってなんやねん」

ユウはぶつぶつ言っているが、ハルカは嬉しかった。また1年一緒にいられると思うとときどきしてくる。しかも、最初は名簿番号順に席が決まっているから、自然と隣の席になるのだ。

ふと、そのときあることに気づいた。

「あれ・・・？ 立花、ちょっと背伸びた？」

「そう！ よく訊いてくれました！ 俺、春休み中に2センチ伸びたっ

「ぼいんや！160センチやで！」

とは言っても小さいことに変わりはないが、ハルカと同じくらいだったユウの背が確かに伸びていることがわかる。

「どうや！すごいやろ」

「はいはい。すごいですねー」

「ちよつと遅い成長期やねん。今に俺のことチビ扱いできなくなん
で」

「「どうせなら惚れ直させるくらいしないだね」」

いつのまにいたのか、衣里ともしーが立花コンビをにやにやとした面持ちで見てる。

「つていうのは冗談だけど、せめて俺の身長は超えてほしいかな」

「本気か・・・？お前、180あるやないか・・・」

ハルカには、惚れ直させることよりももしーの身長を越すことのほうが不可能に思えてきた。だってハルカはすでに惚れ直していたから。

始業式が終わってすぐに行われたことは、ゴリオによる進路調査だった。

「いいかーお前ら。間違っても本気で目指すやつ以外東大とか書くなよー」

この調査票の提出は明日だった。

「ねえ、衣里と亜美ちゃんはなんて書くの？」

「私は看護学校に入りたいなって思ってるの」

亜美は照れながら答えるが、世話好きで優しい彼女にとって最高の仕事だと思う。

「私はたぶん大学だなあ・・・無理だとは思っけど大とか」

みんなちゃんと自分の将来について考えていることをすごいと思った。だけど、

「ハル力は？」

「え？」

「え、じゃないよ。明日提出じゃん」

「そっか・・・そうだよな。どうしよう・・・」

自分の進路。そろそろ決めないといけないことはわかっていたが、いざとなるとどうしようか迷っていた。

そのときだ。教室の中央から服部の声が聞こえてきた。

「立花、大阪の大学受けるんかー!？」

「おまつ・・・大声で言うなや!」

それは、ハル力の心の中で響いた。

結局何も書くことができないまま、ハル力は放課後、誰もいない教室に残っていた。

ただ、白紙の紙を睨みつける。

自分の進路のことよりも、ユウの進路のことのほうが気になってしまう。

大阪の大学に行くんだ――・・・

ガラッ

教室の扉が開いて、誰かが入ってくるのがわかった。驚いてそこを見ると、ジャージ姿のユウがいた。

「あれー？まだおったんかいな」

部活中らしく、タオルを肩にかけている。

「う、うん。ちょっとね・・・立花こそどうしたの？」

「俺は忘れもん取りに来ただけ」

そのままごそごそと机の中を探り出すユウ。

ユウは本当に大阪に行っちゃうんだろうか。何かの間違いであつてほしい。

せつかく同じクラスになれて嬉しいのに、もう離れ離れになってしまうことが悲しい。

「立花さ、大阪の大学に行くって本当？」

ハル力の言葉は、外で部活をやっている野球部の声に溶け込んでいった。

「——ほんまや」

わかっていたことだ。わかってはいたのだが、いざ言われると悲しくなってしまう。

だけど、ハル力はそれを言っではいけないことを知っていたような気がした。

「そつか。うん、まあ・・・がんばれよ」

空笑いをしながら言っただけど、うまく笑えているかわからない。

「立花が大阪行くのやめろって言うんやったら、やめるよ？俺」

同じくらい静かな声で、ユウは呟いた。

ハル力は少しだけ考えて、そして首を振った。

「いい。行って」

「・・・・・・そうやな。ほな——」

ユウは教室を出て行った。後には、空虚感だけが残った。

第21回 進路

「えっ？ もりしーは大学行かないの！？」

「そう。もう勉強したくないし、いつそ就職しようかなって思ってる」

初めてもりしーの進路の話を聞いて、ハルカは驚いた。

正直、衣里と同じ大学に進みたいと思うと思っていたのだが、実際は違ったらしい。

「なにも大学行くだけが進路じゃないしね。ちなみに、菅原はこっちで大学受けるつもりでいるんだって。小山さん会うために」

「そうなの！？」

思わず興奮して傍にいた亜美を振り返ると、亜美は顔を真っ赤にしてこくと頷いた。

「まだわかんないけど、そうなればいいなって思ってる・・・」

「よかったやーん！」

自分のことのように嬉しくなって、ハルカも喜ぶ。今まで遠距離で寂しかった分、この2人には幸せになってほしい。

「立花さんはどうするの？」

「あ・・・私は」

答えようとしたとき、教室の扉が開いてゴリオが入ってきた。ハルカと目が合うと、こっちに来るように手招きをしてくる。

「——？ ごめん、ちょっと行ってくるね」

だけど、ハルカは呼ばれた理由をなんとなく知っていた。

「進路調査票、出してないのは立花だけなんだが」

「う・・・わかってます。わかってますけどー・・・」

ハルカには自分の進路が見えない。目指したいものもないし、興味のあることもない。

焦りだけが襲い掛かる。

そんなハルカの様子を見かねたのか、ゴリオはため息をついて言った。

「しょうがない。特別に明日出せばいいことにしよう。絶対忘れるなよ」

「すいません・・・ありがとうございます」

その日は家庭教師が来る日で、ハルカは志望校が決まらないことを正直に広瀬に話した。

「大丈夫だよ。まだ時間はあるんだし、ゆっくり考えていこう?」

「そうなんですけど・・・なんか焦るっていうか、私以外の人はみんなちゃんと考えてて・・・遠くに行っちゃうような気がして・・・」

心の中の思いを口にするのはなかなか難しかった。

広瀬はそんなハルカを見て、何かを察したらしい。急に持っていた教科書をぱたと閉じた。

「じゃあ、ハルカちゃん。今からアンケートを取ります。僕が言うことになるべく正直に答えてください」

「・・・はい」

いきなり何始めるつもりなのだろうか。

「旅行は好き?」

「へ・・・？もちろん大好きです」

もつと進路に係る質問でもされるのかと思っていたハル力は、なんとなく拍子抜けした。

「例えば旅行に携わる仕事に就けたらおもしろそうだなあって思わない？」

「おもしろそう・・・！」

「・・・ってなカンジで、気楽に考えればいいんだよ。焦んなくていい」

広瀬のアンケートはそういうオチだったらしかったが、単純なハル力はすぐにそれに興味を持った。

旅行に携わる仕事に――・・・

「中尾先生！遅れて申し訳ございませんでした！」

堂々と遅れて出した進路調査票は、第一志望にC大学と書かれている。

「私の家庭教師がC大生なんですけど、そこに旅行業務取扱管理者の合格率がすごく高い講義をやってる先生がいるんです」

「ほー・・・立花は旅行関係の仕事に就きたいのか」

「あつ、まだいいなって思ってるだけなんですけど・・・」

お前には無理だって言われるかもしれないと考えていたが、意外にもゴリオはにっこりと笑って頷く。

「いいじゃないか。最後まであきらめないように頑張りなさい」

「はい！」

やりたいことが見つかった。広瀬の言うとおり、後は焦らずに決めていきたいと思う。

職員室を出たところで、偶然ユウを見かけた。

「立花」

思わず話しかけると、ユウはこっちに気づいていつものようにひょうきんな態度で近づいてくる。

「なんやニヤニヤしてて気色悪ー」

「言ってる言ってる。私が本気になったら怖いんだから」

だけど、きつとそのときのハルカは本気でないことを知っていたような気がする。

どんなにやりたいことを見つけたって、好きな人と離れることはもう決定している。

ここでハルカも大阪に行くという選択肢はあるのだが、それは間違っているような気がするのだ。

だけど、とハルカは思う。

やっぱり寂しいものは寂しい。できるなら今ここで離れたくないって言いたい。

ただ、それだけだった。

第22回 焦り

志望校が決まれば、後はもう勉強するだけだ——・・・と思って
いたのだが、実際にやってみると、今まで勉強していなかったこと
が身に染みてよくわかった。

「だから、これはさっき言ったように時制の一致でやつで・・・」

「なんで時制を一致させなきゃなんないの・・・」

英語の勉強。全然わからなくて、とうとう根本的なことまで疑問
に思えてきた。

やればやるほど焦りだけが大きくなる。

しかも、周りの人たちがすらすらと問題を解いていくのを見てい
るだけですます焦ってきてしまった。

「ハルカ、そろそろ休憩しようか」

「うん。ありがとー、衣里」

手をぐつと伸ばしてハルカはストレッチをする。

こうして、衣里や亜美に勉強をつきあってもらっているが、彼女
たちにも自分の勉強があるのだ。ハルカはそろそろ自分で勉強をし
なければならぬ。

だから、家でもずっと勉強し続けた。

今までこんなに勉強したことがないと自分で思うほど、机と向き
合っていた。

だけど、成績は全然上がらなかった。

「なんや焦るわ」

バスケット部の活動の休憩中、遊びに来たもりしーに立花悠^{ゆう}はそうも
らした。

「なんで焦んの？」

「自分と同じくらいの成績のやつが急に勉強しだすと、こっちまで
勉強せならんような氣いしてくる」

「ああ、立花さんのことか」

もりしーに言われるとなんだか全てを見透かされているような氣
がして、ユウは複雑な表情で俯く。

「そうだよな。自分が部活やってる間に相方が必死になって勉強し
てると思うと焦るよね」

「ほんまなぁー・・・俺もやないとやわ」

ユウは自分の境遇を嘆いているつもりなのだが、もりしー相手だ
となんだかあほらしくなってきた。

「氣になつて勉強できないんだ？」

「やっぱり。もりしーは苦手だと心からそう思った。ユウは肯定も
否定もすることなく、タオルで顔を覆う。

「早くしないと、誰かに取られちゃうかもよ」

「え！？なんか知ってたりするんか！？」

慌てて尋ねたが、もりしーはにっこりと眼鏡の奥で笑っただけだっ
た。

「さあ。どうだろうね。そういうのもなきにしもあらず」

もりしーのことだ。自分の知らない事情をいっぱい知っていて、
きつと他人には何も言わないでいるつもりだ。

ユウはますます焦りだす自分を感じてしまった。

いつのまにか図書室にはハルカ1人だけだった。

ずいぶん長い間勉強していたらしい。窓の外はすでに真っ暗だ。

「やっぱ・・・もう帰らないと」

そう思った瞬間だ。図書室の扉が開いた。

「立花・・・？」

そこにはジャージ姿のユウの姿があった。てっきり部活を終えてもう帰ったと思っていたのにまだいたようだ。

「や・・・靴、あったから・・・まだ勉強してるんかいなー思て・・・」

しどろもどろに答えると、ユウはハルカの目の前の席にそのまま座り込んでしまった。

帰ろうと思っていたハルカはどうしたらいいかわからなくなった。

緊張する。午後7時半、誰もいない図書室。シチュエーションはばつちりだ。

「焦るわ・・・」

「は？」

ムードの欠片もない親父臭い言い方だった。

「俺も勉強せな。このままやとほんまにやばい」

やばいと思ってるのはハルカのほうだった。だってやってもやつても全然成績は上がらないのだ。

志望校を決めてからすでに1ヶ月以上たっている。それなのに、問題を解いていても全然わからない。

「焦ってるのは私のほうだよ・・・もうやんなるくらい」
思わず愚痴がこぼれた。

「やばい思てるのはお前だけちゃうで」

それが、ハルカの愚痴に対するユウの答だった。

「俺もおんなじや。今立花の話聞いてようわかった。俺も・・・やる」

「立花はどうして大阪の大学に行こうと思ったの？やっぱり地元に戻りたいの？」

今までずっと疑問に思っていたことを初めて口にした。訊いてはいけなかったかもしれない。

ユウは少しだけ黙った後、静かに呟いた。

「——前に通ってた高校の提携大学・・・そこにみんな行こうってだからやねん」

やっぱり前の高校の友達が大事なんだろう。ハルカは改めてその違いを感じてしまった。

頑張ってね。

って言いたかったのに、ハルカの口から出てきた言葉は違った。

「行っちゃやだ・・・」

第23回 宿題という名の告白

「……行っちゃだ……」

今まで言えなかった思い。とうとうハルカは口にしてしまった。

これは、相手を困らせる言葉だってことはわかっている。だけど、もうどうしようもなかった。

二度と会えなくなるよりもずっとマシだった。

ユウからの反応は何もない。

おそろおそろハルカは上目遣いに相手を見ると、ずいぶんきょろとした表情でこっちをじっと見ている。

しばらくして、それがだんだん険しいものになっていった。

「なんやねん……行け言ったり、行くな言ったり……」

「え……えーっと、別に行けなんて言っていないような……」

「言った。もう立花がわからへん。俺の人生狂わす気か？」

「はあ？」

せつかく意を決して言った言葉は、この時点で綺麗さっぱり流されている。

煮え切らない思いを抱えながらもハルカはユウの言葉の意味を考える。

「俺はもし小春とやり直せる機会があったら、そうしょ思ってたんや！せやのに……あかんかったやんけ！」

「はあ？それって文化祭のときのこと言ってるの？そんな私のせいじゃないよ！勝手に教室でそんな話し始めたそっちが悪いんですよ？」

いつのまにかハルカもユウも立ち上がって、いつもよりさらにエスカレートした口ゲンカが始まっていく。

「ちゃうわ！別に立花来んくても断るつもりでおったわ！」

その言葉でハルカの意識はそっちに向いてしまったが、ユウはまだテンションが高いまま大声を出した。

「立花が気になってしょうがないんじゃ！ボケ！」

「え………？」

急にばくんと心臓が高鳴った。

それと同時に、ユウの声が急激に小さくなっていく。

「もーわけわからんし……」

「なっなによ……わけわからんって……私のほうがわかんないよ」

緊張と不安で心臓の鼓動が速くなっていく。

「………悪い。勉強の邪魔したわ。帰る」

「えっ？別に……」

帰ろうと思っていたことを思い出したが、少しだけ期待していた分、帰ろうと立ち上がったユウの言動にショックを受けた。

「やっぱりそんなわけないか……」

ため息と共にハルカも帰ろうと準備し始めたとき、すでに図書室の扉近くまで行ったユウがくるっとこっちを向いてきた。

「宿題を出します」

「はい？宿題？」

「数学のベクトルを完璧にマスターすること、英語のリスニングを完璧にすること、それから——」

「まっまだあるの……？」

「げんなりとハルカは構える。」

「俺とつきあうかどうか考えること……以上！」

強引に会話を終了させると、ユウは早々と図書室を出て行く。
ハル力はそれを目をしばたかせて見ていた。

今なんて言った？

『俺とつきあうかどうか？』それは、つまり……告白されたということだろうか？

ユウも自分のことが好き……？

そう考えると、ハル力はどうしようもない感情を覚えた。

まさかこんな日が来るなんて思わなかった。今までケンカばかりだった相手に告白される日が来るなんて。

「わっ……わああ……」

思い出して、ハル力は1人で赤くなる。

その答えはもう決まっている。嬉しくて嬉しくてなんだか涙が出てきそうになった。

ハル力は変なところで律儀な人間だった。

「ハル力……何聞いているの？」

「英語のリスニング中！」

SDに録音した英文を聞き、次の日からハル力は休み時間中英語の勉強をし、放課後は数学のベクトルをやるようになった。

「宿題進んどる？」

ひよっこりと顔を出すユウに、ハル力はどきつとした。

「まあね。少しずつだけど解けるようになってきてる」

「……期待しててええ？」

「どうぞどうぞ。もうアホの立花ハル力とは言わせないから」

「そじゃないんやけど」

ユウは心底長いため息をついたのがわかった。
でも、期待してていいから。どの宿題に対しても……

第24回 一歩進んで二歩下がる（前書き）

なんとも微妙な題名ですいません…

第24回 一步進んで二步下がる

模試の結果が返ってきて、ようやくハルカが日頃の勉強の成果が出ていると実感できたのは、夏休み前のことだった。

「ええっ！？C判定！？」

今までずっとE判定だったのに、ここへ来て初めて成績が上がった。

「なんかいつも広瀬先生にしつこく訊いてるし、最近苦手だった国語とかもできるようになってきて……」

困ったように言くと、亜美は純粹に喜んでくれたが、衣里はやばいやばいという表情になっていく。

「やばい……ハルカは私よりバカだと思ってたのに」

「失礼だなー衣里ちゃん。私はやればできる子なんだから」
けなされても今なら受けとめられる。

「まあこれならハルカも行けるよね」

「まあね。今なら東大にも行ける気がするよ」

「違う。私の知り合いが海の家を開いてるんだけど、今年1泊2日でどうかーって思ってる」

衣里の提案はこうだった。

旅行のことなんて全く考えていなかったハルカは急にモチベーションがぐっと上がるのを感じた。

「行きたい！行く！」

思わず叫ぶと、衣里はにっと笑って頷いた。

「はい！じゃあ決定ー！他に私と亜美ちゃんともりしーと菅原君と立花君が来るからね」

「へー……菅原君帰ってくるんだ！これで全員集合だね」

衣里としてはハルカが立花の2文字に反応してくれることを期待していたのだろうが、それよりも6人全員そろうことが嬉しくて気がつかなかった。

それに、ハルカは――・・・

その電話がかかってきたのは、その日の夕方のことだった。

「もしもし」

知らない電話番号だったのでハルカは出ることに躊躇したが、頻繁にかかってくるために仕方なく出ることにした。

「やっと繋がった。久しぶり、ハルカちゃん」

「も・・・もしかしてカオルさん？」

韓国に修学旅行に行ったときに出会った日本人のモデル、桜井薫かあるの声だった。

「そう。覚えてくれたんだね」

「もちろんです。元気にしてましたか？」

「相変わらずだよ。スオンさんにはいろいろ言われるけど、楽しくやってる。それより聞いてよ。俺、今度日本に行くことになったんだ」

話によると、日本のとある雑誌に「海外で活躍する日本人」という特集があり、それにカオルが出ることになったようだ。

「まだ日程は決まっていけないけど、8月の上旬で行く予定だから、よかったら案内してくれないかな？」

「いいですよー！いつでも言ってください」

そう約束して、ハルカは電話を切った。

この後、何が起こるとも知らないで――・・・

「ジャッジャーン！呼ばれなくても登場ー！」

驚いて振り返ると、なぜかカオルがそこにいたのだ。

「カ、カオルさん！？どうしてここに・・・！？」

「驚いた？ちよつとおどかしてみようかと思って、嘘ついちゃった」
カオルはその整った顔立ちで舌をべつと出してみせる。あいかわらずかわいい男だ。

そのまま2人は一緒に図書室で喋ることにした。

「仕事の関係っていうのは本当だよ。ただ、日程があさってなんだよ。だから1日以上暇なわけ」

「なら言ってくださいよ。すぐくびつくりしたんですから」

「ごめんごめん。早くハル力ちゃんに会いたくなつてさ」

「えっ——・・・」

そう言われた瞬間だった。カオルの顔が近づいてきたと思ったら

扉の開く音をぼーとした意識の片隅で聞こえた。

「やつ！」

「へへ・・・キスされると思った？」

カオルの唇は寸前のところで止まっていた。

その至近距離に驚いて、ハル力は慌てて自分から離れた。
「なっ・・・！」

「でも、こわーい少年が睨んでるからやめとくよ」

その声で初めてハル力は知った。

図書室の扉の前に立花悠ゆうが立っていることに。驚いて目を見開い

「た
ま
ま
で
。」

第25回 私のこと好きなの？

青い空、雲1つない快晴。なんといっても海日和。

そんな日に、バスに乗った6人の若者たち。

2組のカップルと、1組のケンカ中のコンビ。

「何があつたの？」

今日久しぶりに合流した菅原が、その重たい空気を醸^{かも}し出している立花コンビのケンカの原因を尋ねる。

「なんかね、こないだ修学旅行に行ったときに知り合った男の人とトラブルがあつたみたいなの」

遠慮がちに亜美は答える。

事の発端は、カオルが内緒で日本に来たあの日にある。

偶然図書室で、カオルがハルカにキスをしようとしたところを部屋に入ってきたユウに見られてしまったのだ。

その後、

「なんや・・・お邪魔したみたいやな」

意外にもあつさりと図書室を出て行こうとするので、ハルカは慌てて呼び止めた。

「・・・立花！」

「ほな、さいなら」

結局その後うまく話すことができず、そうしていつものようにケンカになってしまった。

「……っていうか、次に会うときにはもうつきあってると思
ってた」

「2人とも器用じゃないからね。素直になれないんだよ」

菅原の率直な意見に、もりしーが的確に答える。

いくらなんでも不器用すぎだと誰もが同時に思った。

6人のそれぞれの思惑を乗せて、バスは海へと向かっていく。

しかし、到着したときに立花コンビ以外の4人は新たな変化を
実感することになる。

バスから降りようとしたとき、ハルカとユウが同時に降りよう
としたが、狭い通路を2人で通れるわけがなかった。

「ええよ。先行けや」

「あ……うん」

たったこれだけの会話だったが、2人が仲直りしたいと思っ
ていることが現れていた。

「「海だー!!」」

「待て！」

真っ先に駆け出そうとしたハルカとユウを呼び止めたのは衣里
だった。

「遊びに来たわけじゃないんだから。しっかり働いてもらっ
つよ」

「「ハイ！」」

潔く返事をしたつもりでいたが、海うみの家のバイトはとんでもなく

忙しかった。

ハル力は店の中で、注文を取ったり、料理を運んだりしたが、天気も良かったせいか多くの観光客が訪れ、店はとても繁盛していた。目の回るような忙しさとはこういうことを言うのだろうか。

しかも、ハル力は多くの失敗をやってしまった。

それはガチャーンという豪快な音だった。

「ハル力、大丈夫？」

お客さんが食べ終わった皿を運んでいるとき、手を滑らせて落としてしまったのだ。

ハル力の手からは血が滴り落ちる。

「手切っちゃったね。裏に水道があるからそこで洗ってくるというよ」

海の家的主人、通称ジョージさんが心配そうに尋ねてくる。

「ごっごめんなさい・・・お皿割っちゃって・・・」

「大丈夫大丈夫。それより結構深く切ったみたいだから、バンソーコー持っていくといいよ」

なにやってんだろう・・・

ハル力は今日の出来事を思い出してため息をつく。

注文を間違えたり、持っていく場所を間違えたり、拳句の果てには皿を割ってしまった。

切った人差し指を水道水で流しながら、その痛みを感じてさらに暗い気持ちになった。

思えば、最近の自分は本当に何をやっているのかわからない。

勉強はできるようになってきたが、ユウの「宿題」はどうなったんだろうか。

素直になれなくて・・・

「なに泣いとんねん」

気がつくと泣いていたらしく、ハルカが振り返ると涙でにじんだユウの姿が見えた。

「だって・・・私・・・バカみたい、だし」

必死で涙を拭う。もう隠すことはできないが。

「アホか。貸してみ」

そう言つてハルカからバンソーコーを取り上げ、持ってきたガゼで傷口の周りの水気を拭いて貼ってくれた。

たったそれだけのことなのに、ハルカはどきどきしてしまった。

「こんなときやけど、1コ訊きたいことあんねん」
「なによ」

「・・・あの韓国男とつきおつてんの？」

カオルのことだろう。ハルカはそれに気づいて小さく首を振る。

「つきあつてない。そういう対象として見てないよ」

「へー・・・そうなんや。へー」

そのままユウは店に戻ってしまおうとするので、ハルカは思わずずっと気になっていたことを口にしてしまった。

「私のこと好きなの!？」

言つた後、ものすごく後悔したが、ユウは振り返ってしかめっ面をする。

「気づくの遅い」

このとき、何かがハルカの中で変わった。

第26回 両想い

あの立花悠^{ゆう}が自分のことを好き――

それを考えるだけで、ハル力はときどきしていた。

だって相手は結構モテる。同じクラスの女子でもユウのことをいいなと思っている人は確かにいる。

そして、今実際にビーチのギャルから逆ナンされている。

「ほんつとかわいいねー」

「やつあの、友達待ってるんで」

そのかわいらしい童顔のせいで、どうやら高校生に見られていないらしい。

ユウもユウで顔を赤くしながら照れているので、ハル力はむかつとした。

「ねえ、1人？」

パラソルの下で1人座っていたハル力は知らない人の声に驚いて見上げる。そこには知らない男がいた。

「もしよかったらこれから一緒に何か食べない？」

実に典型的な誘い文句で、逆にハル力は引いてしまった。

しかし、その男にぐいつと腕を掴まれたときと、ユウがその男の腕を引っ張るのはほとんど同時だった。

「何か用ですか？」

腕を掴まれた男は乱暴にユウの腕を振り払って、一言。

「ちつ。家族連れか」

「ちゃうわー!!」

どうやら弟と勘違いされたらしくて、ユウは両手を振り上げて憤

怒する。

「弟のユウ君、助かったよ。ありがとう」

「弟は今反抗期なんです。話しかけるといってください」

つーんといじけてそのままユウはそっぽを向いてしまった。

ハル力たちは背中越しに座り込んだ。

水着だとなんだか照れくさい。それに、さっきのこともあるって余計に恥ずかしくなる。

そのとき、思った。ハル力が返事をすればもしかしたらつきあえるかもしれないということに。

思わず振り返ると、ユウも同時に振り返ってきた。

互いにいきなり至近距離で見つめ合う形になってしまったので、慌てて目をそらしてごまかす。

「ごっつごめ・・・なんか用だった？」

「や、なんもない。気にすんな」

不器用ゆえに今一步踏み出せなかった。

その日の夜、浜辺で花火をやることにした。近くのコンビニで買った手持ち花火だ。

「ハルカー！花火しよう！」

「うんっ！」

すでに花火を取り囲んでいる衣里、亜美、菅原、もりしーのもとへ行ったが、すぐにユウがいないことに気づいた。

「ねえ・・・立花は？」

「海の家に忘れ物したんだって」

振り返ったが、海の家からユウが出てくる様子はない。

「でももう5分くらい前だからちよつと遅いね」
さすがのもりしーも怪訝けげんそうにしている。

「私、ちよつと呼んでくるよ。先に花火やってて」
そう言つてハルカは駆け出していった。

海の家には静かだった。ちょうどジョージさんも買い出しに出かけているはずだ。

「立花ー……」

控えめに呼んでみたが、ユウからの返事はなかった。ここにいないのかもしれない。

あきらめて戻ろうとすると、微かな音が聞こえてきた。

すー……

それは寝息だった。

よく見てみると、ここからは死角になつて見えないイスに座つて、ユウが机に突つ伏した状態で寝ているのだ。

「おい」

呼びかけても返事をしない。今日はよっぽど疲れたらしい。

それもそうだとハルカは思う。

そして、その寝顔をまじまじと見つめた。まつ毛が長い。

「ユウ」

それは声にならない声だったが、なぜかそのときユウの目がぱちつと開いた。

驚く間もなかった。すぐに目が合ったが、今度は逃げなかった。相手の真剣な眼差しを受けとめた。

あとは、もう、自然な流れで。
2人は唇を重ねた。

「そんな固まらんでも・・・」

「だ、だって」

キスをした後、抱き寄せられたハルカの体はがちごちに固まっていた。

「ほな、みんなのどこ行く？」

「ま、待って！」

ハルカは思わずユウの腕を掴んだ。

「あと1分だけ一緒にいたい・・・」

「俺は彼女として一緒にいてほしいのですが」

そのときのユウの顔は、今まで見たこともないくらい真剣そのものだった。

「はい——」

触れ合った2つの手が熱かった。

ようやく2人は素直になることができた・・・

第26回 両想い（後書き）

ここまで長かったです……が、

……

第27回 電話の音（前書き）

最初に言っておきます。

この次の回から話が一気に大学生まで飛びます。

第27回 電話の音

「つきあうことになったー!?」

「しーっ！声が大きいよ！」

慌てて衣里の口を押さえて、ハル力は他の人に聞こえないようにする。

新学期になって、初めてハル力はユウとつきあっていることを衣里と亜美に告白した。

「ようやくハル力にも春が来たかあ〜」

「よかったね、よかったね、ハル力ちゃん」

「うん・・・ほんと2人のおかげです」

ハル力は顔を真っ赤にしながらお礼を言う。

思い返せば、夏休み。ようやく自分の気持ちを言うことができた。現在、念願叶ったの恋人同士だ。

「お、噂をすれば彼氏が来たよ」

衣里の声に反応してハル力は振り返る。彼氏と言われるとなんだか照れくさいが、悪い気はしない。

ハル力は服部と歩いてくるユウのほうを見た。

「おはよー」

隣にいる衣里と亜美が気軽に挨拶をする中、ハル力はなぜか恥ずかしくなって声が出なかった。

「おー、はよ」

気づいたユウと服部も挨拶を返す。

意識していたのは自分だけだった・・・ハル力は少し後悔して顔をそむけると、彼らとすれ違う際に小さな声が聞こえてきた。

「おはよ」

顔を上げると、ハルカにだけ挨拶をしてくるユウがいた。

「おはよ！」

思わず大声で挨拶を返すと、ユウは苦笑してしまう。

このとき、つきあっているということを改めて実感した。

1学期からの続きで、2学期早々日直の仕事がまわってきたが、むしろハルカにとってはハッピーだった。

「部活も終わっちゃったし、俺も本格的に勉強始めんなー」
ほつきでこみを掃きながらユウが呟く。

「立花が目指してる大学って偏差値どれくらいなの？」

「………知らん」

この男は自分の行きたい大学のレベルも知らないのかとハルカは内心呆れた。

「C大学ってそんな偏差値高いん？」

「え、学部によっては高いけど、なんでそんなこと訊くの？」

「だって俺もそこ目指そ思てるから」

心底不思議に思ったハルカに対し、逆に心底不思議そうに答えられてしまった。

「えっ！？大阪の大学に行くんじゃないの！？」

「そういう話もあったんやけど、実際別の大学に行くっちゃう友達もあるし、受けてはみるけど滑り止めやな」

「全然場所違うじゃん。なんでC大なのよ」

「そりゃあお前………一緒の大学に行きたいからじゃあダメですかね」

予想外にもこんな嬉しいことをきよとした表情で言うてくる
ことが恥ずかしかった。

ハル力は慌ててちりとりを取りにいくフリをして、赤くなりかけた頬をごまかす。

嬉しい・・・好きな人からそう言うてもらえるなんて・・・
幸せかも。

「受かるといいね。私も立花も。もちろん他のみんなもだけど」

「せやな。そのためにはまず勉強や！」

「じゃあ・・・これあげる。お守りだよ」

ハル力はバッグの中から1つのキーホルダーを取り出す。それを
ユウの目の前に差し出した。

「コレ・・・『31』のキーホルダーやん」

「知ってる？『31』のグッズ持ってるだけでご利益があるんだよ」
もちろんそんな話はないが、ハル力はそうだと信じている。根拠
はない。

「サンキュー。ほな、これ持って勉強するわ」

急に腕まくりをして、ユウは気合を入れる。

「なあ、今度の日曜日ヒマ？一緒に勉強せえへん？」

「いいよ！するする」

少しだけ一緒にキャンパスライフを送っている将来を想像してしま
い、ハル力は1人浮かれていた。

勉強しなければならなかったことはわかっていたが、次の日曜に会え
ることが楽しみだった。

だけど、このときはまだ気づいていなかった。一緒にキャンパス

ライフを過ごすことができないということに。
このときがどんなに幸せだったのか、失ってから気づくことになる。

全てはそのときに鳴った1本の電話から始まる。

ブーンブーン

無機質な機械音が2人だけの教室に鳴り響く。

「悪い。俺や」

ユウはケータイを取り出して会話を始める。

電話はすぐに切れた。

「・・・今日はまっすぐ帰れだ」と

「そつなの？じゃあ早く終わらせようか」

全ては始まった。

第27回 電話の音（後書き）

次から大学編へと変わるんですが――…
この空白の間に何かがあったわけです。
それはまた後日に……

第28回 新たな生活（前書き）

少し時間が空きましたが、いよいよ大学編です。
よろしければ暇なときにも読んでください。

第28回 新たな生活

時は流れる。

季節は巡り、桜の舞い散る春……立花悠^{はるか}はある人物を待っていた。

「ハルカ！」

息を切らしながら現れたのは、桜井薫だった。

「大学生活にはもう慣れた？」

「少しずつ……でも、大学の授業って90分だから長く感じちゃいますけど」

「大学に入学してから2週間。ハルカは大学生になっていた。」

思えば3年生のとき、今までしたことがないほど勉強をした。そのかいあってか、なんとか大学に合格。無事にここまで来ることができた。

ちなみに、同じ大学を希望していた宮崎衣里も合格し、同じキャンパスライフを過ごしている。

ハルカはカオルを食堂へと案内する。

「日本へはどのくらいいる予定ですか？」

「今回はあさつてで帰んなきゃなんないんだけど、冬に1ヶ月くらい休みを取ろうと思ってる」

食堂で積み重ねられたトレーを取りながら、カオルが答える。

「そのときは一緒に過ごそう？クリスマスとか」

カオルが真剣に言っていることがわかってるので、ハルカは曖昧にしか答えることができなかった。

カオルは優しいし、かつこいいし、はっきり言って非の打ちどこ

るのない青年だ。

今だってこうして一緒にごはんを食べているが、周囲の視線が明らかにカオルに向いていることがわかる。

だけど・・・ハル力はたぶんカオルの気持ちに応えることはできないだろう。

「ハル力？」

高校生のときの嫌なことを思い出してしまい、ハル力は慌ててそれを振り払った。

これはもう思い出さないって決めたんだから・・・

「ハル力！こつち」

3限の教室。人がいっぱいいる中、手を上げて手招きをしている人を発見した。

「衣里。席取つといてくれたんだ」

「だって取つとかないと座れなくなっちゃうじゃん」

いつもは衣里と一緒にこの教室で食べるのだが、今日はハル力がカオルと一緒に食べたため、衣里が席を取っておいてくれたのだ。

「カオルさん、元気だった？」

「うん。衣里によろしくって言ってたよ」

「懐かしいなあ、修学旅行の時のこと思い出すなー」

衣里はしみじみと昔を思い出す。

「みんな元気かな？亜美ちゃんは慣れないって言ってたけど、器用だからきつと上手くやってるだろうね」

亜美も無事に看護学校に合格して、今は夢に向かって一歩ずつ前進している。

もりしーは有名自動車会社に就職し、日々稼いでいるらしい。
菅原はこっちの大学に合格して、週末に亜美とデートしているそ
うだ。

そして——あの人、

そのとき、チャイムの音が鳴り、授業の開始が知らされた。

「明日、カオルさんと一緒に映画見に行くんだ。いいでしょ」

「べつにー。でもよかったじゃん。ちょっと安心した」

「安心・・・？」

「ほら、いろいろあつたけど、やっぱりハルカには幸せになってほ
しいからさ」

そこまで言つて、衣里は急にしまったというような顔をした。

「ごつごめん・・・こんなこと言っちゃって」

「いって。もうあのときのことなんか全然忘れてたんだから」

そうだ。忘れなきゃだめだ。

だけど、ふとした瞬間に思い出してしまうことを否定することは
できない。

ハルカにとってやっぱり大事な想いだったから、それをなかった
ことにすることなんてできなかった。

翌日、ハルカはカオルと一緒に映画を見に行った。

見た映画は大好きなシリーズ『31』の映画バージョンだ。

「ハルカ、よっぽどこれが好きなんだね。鍵のキーホルダーもこれ
だし」

「そうなんです・・・これは大事なものです」

答えになつていない返事をして、ハルカは無意識に両手をぎゅっと握り締める。

と、そのとき、視界の片隅に見知った人の後姿を見たような気がした。

ハルカは思わず追いかけてしまった。

「たっ……!」

声をかけようとした瞬間、その人の横顔が見えて、違う人だということがわかった。

「彼氏だと思つたの?」

ハルカを追いかけたカオルが後ろでそう呟いた。

「……………」

否定することができない。だって実際そう思つたんだから。

それは、カオルに対してすぐく申し訳ないことのように思えた。

「忘れなきゃだめだってことわかつてるんですけど……もうちょっとだけ時間をください」

弱気なハルカに対し、カオルは静かにハルカの頭に手を置いてぽんぽんとなでた。

「俺は忘れるって言ってるわけじゃないよ。ただ、ハルカにとって居心地のいい男になればいいと思ってる」

「なんで……なんでそんなに優しいんですか……?」

絶対に応えられないのに。カオルだってそれがわかっているはずなのに。

それでも、そんな優しさがハルカには嬉しくて、辛かった。

第28回 新たな生活（後書き）

何があつたか、はそのうちわかると思います。

第29回 未練

大学生になったらやりたいことがハルカにはあった。それはサークルに入ることだ。

数あるサークルの中からハルカと衣里がそれを決めたのは、

「バドミントンサークルに入らない？」

という広瀬の一言だった。

このサークルは部活のように本格的ではないが、男女共に楽しめるというメリットがある。

案外こういうところで出合いを求めたりするのだろう。割と人数は多かった。

「あつ、広瀬先生！今日は早いですね」

「ハルカちゃん・ん・先生はやめようよ。もう俺力テキョじやないんだから」

「先生のおかげでこの大学に合格できたんだから、敬意を持ってそう呼ばせていただきます！」

すでに何度目かになるこのセリフで、広瀬はだんだんあきらめてきているらしい。

「ハルカちゃんさ、今度の土曜の飲み会来るよね？」

「もちろん行きますよ！先生も来ますよね？」

「行く行く。なんか他のサークルの人たちも来るんだって」

それは初耳で、ハルカはへーっと思った。

広瀬の言つとおり、土曜日の飲み会には別のサークルの人たちも来ていた。

「どーも！野球愛好会でーす！」
まるで合コンのようなノリで彼らは現れた。

ハルカはその中で、とある女の子が気になってしまった。別にやましい意味ではなく、彼女が関西弁を喋っていたからだ。

「どーも！一緒に喋ってもええですか？」
「どうぞどうぞ！」

さっきから見ていると、彼女は知らない人でもとにかく話しかけるらしい。ハルカの所にもやって来た。

「私、経済学部1年の篠原真由美っていいです。よろしくね！」

「うん！私は文学部1年、立花悠はるかっていいです」

自然な流れで自己紹介をしたつもりなのだが、急にえっと驚かれました。

「立花って立つ花って書く？あとハルカってこういう字？」

真由美は空中に『悠』という字を書く。

ハルカが頷くと、真由美は嬉しそうに顔をほころばせた。

「もしかして・・・ユウって知つとる？立花悠ゆう」

その名前を聞いて、ハルカは一瞬固まってしまった。

なぜ今この名前が出てくるのだろうか。彼女はユウのことを知っているのだろうか。

「私、いとこやからたまに会あってるけど、おんなじ漢字書く彼女ができたって去年の夏休みに白状させたんよー！それってハルカちゃんのことちゃう？」

去年の夏休み・・・確かにつきあっていた。告白されてあの海でキスをした。だけど――・・・

「うん。あのときはつきあってたかな」

「やつぱり！なんややつぱりそうなんや！最近会ってへんねやけど、

「元気にしとる？」

「私も会ってないんだ……もうつきあってないし」
軽く言い放つと、真由美はきよとした表情になる。

「別れたん？だってユウが大学に受かったとき、私おめでとうって電話したけど、そんなとき彼女おるみたいなこと言ってたけどなー」
「えっ……」

誰のことだろう……ハルカは一瞬考えたが、すぐに自分ではないとわかって意気消沈する。

「ごめん……言われたないこと言うてしもた？」

心配そうに尋ねる真由美に、ハルカは手を振って笑ってみせる。

「そんなじゃないよ。それより……立花、元気にしてる？」

「元気は元気やねんけど……なんかあつたみたいでな？電話しててもイマイチ盛り上がりへんかったん」

なんかあつた……だけど、ハルカにはそれを心配する権利はないと思つた。

だってあのとき、ハルカとユウは別れたんだから——……

『あつハルカちゃん？』

その電話の声はとても陽気で、一瞬ハルカは誰だかわからなかった。

『ウチウチ。こないだの飲み会で喋った篠原真由美！』

「ああ、真由美ちゃんか。どうしたの？」

ケータイの番号とアドレスを交換したことを思い出して、時計を見る。まだ朝の6時前だ。

『突然やけど、ハルカちゃん今日授業サボっても平気？』

「んー・・そうだねえ、必修ないから平気だと思う」

きよとんとして答える。

『じゃあ、今から一緒に大阪行かへん？ウチの車で送ってくからさ

！』

「今から！？」

さすがに驚いて声を張り上げてしまう。それよりも、大阪に行くという行動がなんだか嫌だった。

『うん。ちよつと見てみたくない？今のユウ』

真由美はやっぱり明るい声でそう提案する。彼女はきっと思い立ったら即行動タイプなんだろう。

そして、そんな彼女の性格にハルカも感化された。

「行きたい・・私も連れてって。大阪に」

『ほな、けってーい！』

我ながら未練たらたらだと思った。もう別れたのに・・・

第30回 再会

高速道路を降り、篠原真由美の運転する車はO大学の駐車場へとたどり着いた。

「まゆちゃんはもうして今日大阪に行こうと思ったの？」

車中で1番気になっていたことをハル力は口にした。

「ばーちゃんがギックリ腰になったって聞いたからね。戻ってきたの」

へーっと思つた瞬間だった。なぜかハル力は強引に車から下ろされてしまった。

「へっ？へ？」

「ウチはばーちゃんち行くからここにおつてな？3時頃には迎えに行くから」

そう言うつと、真由美は車を走らせてしまった。

1人残されたハル力は仕方なく大学構内に入ってみることにした。今の季節は桜も散つてしまい、すでに木々も新緑に染まり始めている。ハル力はその下を歩いた。

時々、学生とすれ違う。その中にひょっとしたらユウがいるような気がして、なんとなく緊張してしまった。

会えるわけなんてないのに。

もし会ったとしてもこんな所にいる時点で、ストーカーだと思われるってしまう。

「ストーカーじゃん！」

思わず声に出してしまった。

そうだ・・・自分は何をしているのだろう。前の彼氏に会いたい

ために大阪まで来てしまうなんて…………

そのとき、多くの学生がハル力を通り過ぎていった。
ハル力を無視して、時は流れていく。

それは、高校時代、衣里と亜美に初めてユウとつきあっていることを話した翌日のことだった。

突然ユウから別れようと言われた。

「……………なんで……………」

情けなく声が震えてしまった。

「やっぱ俺お前のこと、彼女としては思えへんわ。ごめんな？」

決してハル力の目は見ずに、ただどまるで一緒に帰れないと言うようなノリで言われた。

「ごめんって……………なんで急にそんなこと言うの……………」

「だから、彼女としては思えんねや。これは立花が悪いんじゃないくて、俺の問題や。ごめん」

ちようど一緒に帰っていたときだった。

ハル力はそのまま立ち止まってしまったが、ユウはどんどん歩き続けていく。ハル力を置いていく。

追いかけることができなかった。どんどん離れていく背中をただ見送ることしかできなかった。

だから、叫んだ。

「ばかあっ！！！！」

こんなのってないよ。こんなのひどすぎるよ。

結局それ以上の理由を聞くことなく、高校生活は過ぎていった。

衣里も最初は心配していたが、理不尽なユウの態度にだんだん怒れてきたらしく、すぐに一切の口をきかなくなった。

もりしーはそれとなく理由を訊こうとしたのだが、それでもユウは何も言わなかったらしい。

その後、ユウはC大学を受けずに、大阪の大学を受けて合格した。まともに話さなくなってから、そろそろ1年がたとうとしている。

むなしくなってきた……

ハル力は食堂で午後3時まで時間をつぶした。真由美に電話すると、彼女はすぐに来てくれた。

「何しとん!？」

「何って……食事？」

「アホ!何しにここに來た言ってるんや!」

真由美の怒声は騒がしい食堂にも響き渡った。

「ユウに会ったためちやうんかい!」

そう。そのためにここに來たんだ。

だけど冷静になって考えてみて、これが相手にとっては迷惑な行動以外の何物でもないことに気づいた。

「——そうなんだけど……もう会えないよ……ふられちゃったもん……」

また真由美に何か言われることを覚悟していたが、彼女は何も言わずにハル力を立たせた。

「ごめんな？ハルカちゃんの気持ちなんも考えとらんかった・・・今日は帰るか」

ハルカは黙ってこくと頷いた。

真由美の心遣いが嬉しかった。今はただそれに甘えていたい。

だけど、すぐにそんな状況ではなくなってしまった。

2人が帰ろうとしたときに、ちょうど入ってきた何人かの学生とすれ違った。

「そう言っというて、ほんまはデートやろー？小春ちゃん、えらいかわいいもんなあ」

「ちやうつて。日曜はバイトや言うてるやろ？」

「立花の言うことなんてあてにならんわ」

その声、言葉に反応して、ハルカは振り返った。

そこには4人の男女がいて、その中で2組のカップルに分かれてるように見えた。

その1組をハルカは見たことがあった。

何気なくこっちに目を向けた男子とハルカは目が合った。

お互いに時間が止まった。

これが、立花悠と、立花悠が再会した瞬間だった。

第31回 もう限界

しばらく時間が止まった。ハルカはユウを見たまま動けなくなってしまった。

ユウもしばらく驚いたような表情でハルカを見ていたが、やがてふいっと目をそらした。

「ユウ！やっほー」

真由美が気楽に声をかける。ハルカを少し気にしながら挨拶しているのがわかった。

「よー・・・今日授業サボりかよ」

「まあそやなー。ばーちゃんの様子を見に来たついでつちゅうん？ハルカちゃんにもつきおうてもろてん」

「へーそうなんや」

そう言いながら、ユウはハルカを見ることはなかった。

そのとき、ユウの隣にいた帽子をかぶった男が興味津々にハルカを見てくるのがわかった。

「立花の友達さんですか？」

「ウチはいとこやねん」

ハルカが答える前に真由美が答える。

「ええな〜立花。モテモテやないかい」

「おうよ。下駄箱開けたらいつもラブレターぎょーさん落ちてきたで」

ユウは財布を出しながら言う。そのときバッグに1つのキーホルダーがついているのが見えた。それは、ハルカが以前あげたものだった。

ハルカの視線に気づいたのか、ユウが急いでそれを隠すのがわか

った。

なんで・・・？

もうずいぶん前に別れたんだから、そんなものはもうないと思っていた。ハル力の大好きな『31』のキーホルダーなんて。

真意を図りかねたままだったが、ハル力は真由美の腕を掴んだ。

「まゆちゃん、そろそろ行こっか」

「そやね」

改めてお騒がせしましたと謝ろうと思ったとき、ハル力はある人と目が合った。小春、ユウの元カノだ。

その不安そうな顔を見て、ハル力はここへ来るべきではなかったと悟った。

もう忘れよう。新しい恋をしよう。

ハル力はそう決心して歩き出した。後ろを振り返ることはなかった。

「送ってかなくてもええの？」

小春の一声で、ユウははっとして我に返る。無意識にずっとハル力と真由美の背中をずっと見ていたらしかった。

「ええって。たぶん車で来たと思うし」

「・・・せつかくここまで顔見に来てくれたんやから、せめて大学出るまで見送ったらええと思うよ？」

その言葉で、一瞬だけユウは心が揺れた。

だけど、やっぱり追いかけてようとは思わなかった。

もし追いかけたら、きっと後には戻れなくなる。それだけは絶対だめだ・・・

「今日はありがとう。おかげですつきりしたよ」

車の中でハル力は真由美にお礼を言った。運転席の真由美は一瞬だけこつちを見て、申し訳なさそうにする。

「ごめん・・・ハル力ちゃんの気持ち全然考えとらんかった。そら気まずいよね・・・」

「ううん。私が望んでここに来たから」

ここから先は、真由美に対する言葉というよりは自分自身に向けたものだった。

「もうきつぱりあきらめる。それで、また恋をする！」

「うん・・・せやな！それがええと思う！」

「でしょ？よつしゃー・・・」

いつまでもうじうじしているのは性に合わない。

ハル力はばしんと両頬を叩いて、自分に気合を入れた。きつぱりあきらめるために。

だけど、いざ家に帰ってくると、1人自分の部屋にこもると急に寂しさが湧き上がってきた。

さっきあきらめようと決めたばかりなのに。

なんなんだろう・・・この寂しさは。

本当はわかっていた。もうユウにはユウの生活があって自分が立ち入ることができないということ。

それを否定したいがために、大阪の大学まで行ったということを。

実際に行ってみてそれがよくわかった。

もう・・・限界。

ハル力はずっと我慢していたもの——涙が頬を伝うのがわかった。せめて理由を言ってみてほしかった。つきあつてすぐ、あんな言葉でふられるなんて思ってもみなかった。

ハル力の時間はあそこで止まってしまった。

だから、あきらめないとだめだ。

無理にでもそうしないと、ハル力はきつとあの時間から動き出せないでいる。

・・・・・・新しい恋をしよう。

第32回 振り返ると、

大学の最初のテスト週間が終わると、大学生は長い夏休みに入る。8月の上旬、ハルカたちの地元では大きな祭りが行われることになった。いた。

「ハルカ、おっそーい！」

びしつと浴衣を着こなしている衣里が開口一番に言う。対するハルカは慣れない浴衣に歩くのももどかしかった。

「ごめーん・・・こんなに歩きにくいなんて思わなくって」

改めて周囲を見渡し、懐かしい顔ぶれを見た。

「亜美ちゃん、菅原君、久しぶり！」

「うん！ハルカちゃん元気だったー？」

「もっちらん」

久しぶりに会った亜美としばらく話した後、ハルカはあることに気づいた。

「あれ・・・？そういえばもりしーは来ないの？」

「うん・・・なんか仕事でちょっと遅れるってさ」

心底残念そうに衣里が答える。このカップルはいつまでたってもラブラブだ。

そのとき、空に花火が咲いた。そして、一拍遅れてドンツと響く。「行こ。今日は楽しまなくっちゃ」

衣里の一声で、4人は川沿いの道を歩き出した。

辺りは、多くの屋台が連なっていた。

人も多く、屋台の1つ1つを見ることはできなかったが、ハル力たちはチヨコバナナを買って食べた。

「菅原君、大学生活はどう？」

4人は人通りを避けて、誰もいない神社の階段に座り込んだ。

「楽しいよ。結構気楽だし。そっちは？」

「——うん。楽しいよ」

もちろん嘘ではない。だけど、どうしても大阪に行ったときのことを思い出してしまう、ハル力は暗くなってしまう。

自分のいないところで、あんなに楽しそうにしているユウ。だめだ。もう思い出さないって決めたのに。

「まあ、これからもっと楽しくなるよね。亜美ちゃんのナース姿見られるかもしれないんだから」

そうからかってみると、一見不良顔をしている菅原がすごく照れくさそうにした。そのギャップが見ていて面白い。

「まあハル力ちゃん・・・そんなこと言わないでよー！」

亜美も真っ赤になっている。

そんな2人の様子を見て、ハル力は純粋に羨ましいと思った。

去年自分もつきあいだした頃は、きつとこんな関係が続いていくんだと疑っていなかった。

「あれっ・・・もりしーの声が聞こえた」

衣里の言葉で、ハル力ははっとして我に返る。

驚いて彼女を見ると、衣里はすくつと立ち上がってどこかに向かっていた。

衣里の向かった所、そこには確かにもりしーがいたが・・・他にもいた。

「他人の事情に首を突っ込む主義じゃないけど、そんな中途半端な態度でいてもらいたくないな」

珍しく怒気を含んだもりしーの声は、ユウにとって痛いものになった。

夏休みになって祭りに来ないかともりしーに誘われて愛知に戻ってきたけれど、やっぱり会うことができずにこうして誰もいない神社にこもっていた。

「そういう態度は、立花さんに対しても元カノさんに対しても失礼だよ」

「……知つとんのか」

「まあね。ウチの母親の知り合いがたまたまその現場を見てた」
淡々ともりしーは答える。

本当にもりしーには敵わないと思う。ユウは頭をぐしゃぐしゃとさせながらその場にしゃがみこんだ。

わからない。自分のとっている行動が正しいのか正しくないのかわからない。なんて。

「立花は誰が好きなんだよ」

「俺は——俺の好きな人は——」

迷っているわけではない。だけど、もし口にしてしまったら絶対自分の気持ちに歯止めがつかなくなってしまう。

だから、こう答えた。

「立花だって答えさせたいんやろ？」

「……」

「もう俺たちは終わったんや。今さら戻る気にもならんし、それにもう好きじゃない」

そこまで言っつて、ユウは固まってしまった。

目の前にはいつのまにいたのか、衣里の姿があつて……。その後ろにハル力がいたからだ――

好きじゃない……

知ってる。そんなこと言われなくてもわかつてる。

自分で自分に言い聞かせながら、ハル力は走り続けていた。あの場にいるのが辛すぎたから……

もうやだ、疲れた……

結構な距離を浴衣姿で走ってきたらしい。地元でも全然知らない所まで来てしまっていた。

「あれ……ここどこ……？」

居場所がわからなくなつて、ハル力は意味もなく辺りを彷徨う。ただでさえ悲しいのに、さらに心細くなつてしまった。

と、そのときだ。

「えっ……」

ハル力の腕を誰かが掴んだ。

第32回 振り返ると、（後書き）

すぐに1度最終回にするつもりでいます。
たぶんとっても消化不良で終わるので
番外編を書きたいと思っています。

第33回 好きだ

ハル力が振り返ると、そこにはユウが立っていた。

「立花・・・」

呟いてからハル力はさっきのことを思い出さずんつと暗くなる。少し背の高くなったユウを見たら余計に悲しくなってしまった。

「いっぺん話し合 wanna 思ってたんや」

ユウの声は静かに響き渡る。

「やだ・・・聞きたくない。聞きたくないよ」

ハル力はぶんぶんと首を振る。辛すぎるだけだ。これ以上ユウの話を聞くのは。

しばらくユウはハル力の腕を掴んだままだったが、やがて静かにその手を離れた。

正面から向き合う形になり、久しぶりにハル力はまともにユウの顔を見ることになった。

「好きじゃないのなんて・・・知ってるよ・・・」

情けなくも、出た声はすぐガラガラだった。ハル力は両手で涙を拭いながら必死にこれ以上聞きたくないことをアピールする。

「もういいよ。もうわかってるから・・・お願いだから・・・もう聞きたくないよ」

「——立花っ」

「もういいってば!」

食べかけのチョコバナナを投げつけて、ハル力はダッシュで逃げ出した。

「待てよ!」

後ろでそんな声が聞こえてきたが、もちろん待つ気なんてこれっぽちもなかった・・・が、逃げ出して10秒後、すぐに追いつかれてしまった。

腕を掴まれ、強引にユウのほうに体を向かせられる。

すぐに、投げつけたチヨコバナナがユウのTシャツにべっとりとついているのがわかった。

「あ・・・ごめ」

「謝るのは俺のほうや。ごめん・・・いろいろ」

ユウは真剣な面持ちでハル力をまっすぐに見てくる。

言いくいときや、嘘をつくとき、たいてい目をそらすクセがユウにはある。だから、これは本心だろうとハル力は思った。

「さつきもりしーに言ったん・・・半分はほんまや。俺たちはもう終わってるっていうこと」

ハル力は俯いて小さく頷く。

「でも、好きじゃないいうんはほんまの話やない。むしろ・・・逆や」

「逆、って・・・」

ハル力が呟くと、ユウは顔を真っ赤にさせて俯いてしまう。

「ちゃんと言ってくんなきゃわかんないよ・・・」

「・・・言ったらあかん」

「なっ・・・なんですよ。なんでそういう大事なこともなんにも言ってくんないの？このヘタレ！」

「ヘタレ・・・なんやねん！その言い方は！？」

いつのまにか重々しい空気から、高校時代のケンカのようになっ
てしまっている。

「ヘタレだからそう言ってるのよ！」

「アホか！俺はそんなんじやあらへん！」

「じゃあはつきり言いなさいよ！今まで言わなかったこと全部！」

「——好きだ」

いきなり静かな声でそう言われて、ハルカは上がりつつあったデ
ンションが急に下がるのを感じた。

「勝手なこと言ってるってわかつとる。せやけど、やっぱ俺・・お
前のことずっと気になってしょうがないんや・・・」

「ほんとに勝手だよ・・・」

ようやくハルカが言葉を発したが、ユウが次に話した言葉は予想
外のものだった。

「俺・・・小春を傷つけてしもた」

一瞬、ユウが何を言っているのかわからなかった。

それは1年前のこと、2学期の始業式のことだった。

その日、ユウはたまたま両親から早く帰るように言われて車通り
の激しい時間帯に、大通りを自転車走っていた。

と、ちょうどそのとき、横断歩道の向こう側に見知った人間を見
つけた。

「・・・小春？」

後で聞いた話によると、小春はライブがあるために愛知に来てい
たらしかつたが、そのときはユウに会いたくて高校まで行こうとし
ていたようだった。

とにかく小春の姿に気をとられて、ユウは目の前の車に気がつか
なかった。

そして、気づいたときにはユウをかばって倒れている小春の姿があった。

命に別状はなかったが、小春の体にはそのときの傷跡が残ってしまった。

「そんなの・・・立花のせいじゃないじゃん」

その話を聞き終えて、ハルカはそう呟いた。気楽に言っただけではない。それが精一杯だったのだ。

「責任・・・とか考えてるの？」

「・・・・・・・・・・」

「そんな気持ちで小春さんと一緒にいるなんて・・・小春さんがかわいそうだよ！」

思わず怒鳴ってしまったが、ユウは俯いて頷くだけだった。

「小春さんときあってんの？」

ユウは答えない。

「私、そんなに辛抱強くないから・・・もう無理だからね・・・」

それだけ言って、ハルカはユウの前から去った。

最終回 近距離で

立花悠^{ゆう}が大阪に戻るといふ話を衣里から聞いたのは、夏休みも終わりに差し掛かったときだった。

「ほんつと信じらんない！なんなのよー」

衣里は相当怒っている。ハル力はただ笑うしかなかった。

「もー・・・ハル力が怒らないから私が怒ってるんだからね」

「ありがと。衣里が怒ってくれるから私も怒らなくて済むのかも」

「私完璧にワルモンじゃん」

しょんぼりと衣里肩を落とす。

正直、衣里や他の友達の助けがなければあるときどれくらい落ちこんでしまったのかわからない。みんなには感謝している。

「――明日、会う約束してるんだ」

ハル力は静かに語った。衣里が驚いたような表情でこっちを見る。

「え？そうなの？」

「うん。一応はつきりさせておくつもり。向こうもなんかあったみたいだし」

そうだ。明日は今までの中途半端な想いはつきりとさせるために会う約束をした。

それがどんな結果になっただとしても、きっと後悔はしない。

翌日の天気は、曇り時々晴れというものだった。

ハル力は約束している臨海広場のベンチへと急いだ。すでにそこにはユウが座っていた。

「ごめん・待たせちゃって」

「いや、俺がちよいはよ来ただけやから」

ユウは高校生のときと同じように笑顔で出迎えてくれる。ハルカはその隣に座った。

緊張する。こうして呼び出したはいいものの、いざ何を話せばいいのかわからなくなってしまう。

「ごめんな？なんやいろいろ迷惑かけてしもて」

「うつん・・まあ、もういいよ」

こういうとき迷惑なんてかかってないと言えばよかったのだろうか。

ハルカは様々なことを考えながら自分の言うべき言葉を考えた。

「あのね・・こないだのお祭りのときのことなんだけど・・・」
「・・・・・っ！」

そのとき、ユウが何かを言おうとしていることがわかった。

ただどすぐに口を閉ざしてしまう。ハルカはその態度にじれったさを感じてしまった。

「不器用・・だよね」

思ったことを正直に述べると、ユウははにかんだように笑った。

「そうかもな。何度も追いかけようとは思ったんやで」

「そうなんだ」

そこまで言うと、また沈黙が訪れた。

だけど、この沈黙は苦ではない。むしろこんなに近くにユウを感じることができるのだから感謝しなくちゃいけないのかもしれない。

と、そのときだ。ベンチに置いていたハルカの右手に何かが当た

った。

それがユウの左手だということに気づくのにそれほど時間はかからなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

上から指をからめるようにして握られたユウの手はとても温かかった。

これが不器用なコンビの精一杯の愛情表現だった。

それから、月日は流れた。

ハルカはカオルと一緒にショッピングをしていた。

「ハルカ、これこれ！絶対似合うと思うよ！」

そう言っただけカオルは白いマフラーを手取る。

「ほんとだ・・・かわいい！」

「今日はクリスマスイブだもんね。俺が買ってあげるよ」

「なんでアンタがいるんですか」

背後からユウの声が聞こえてきた。

「だって俺はハルカとクリスマス過ごそうってずいぶん前に約束してたんだもん。後から来たのはそっちだろ？」

いけしゃあしゃあとカオルは言っただけ。ユウは小さい体で怒りを露にしている。

「デートなんやから邪魔すんな！」

ハルカはその様子を笑って見ていた。

「・・・・ったくなんなんだよ。心の狭い彼氏だな・・・・」

カオルがくるりとこっちを向いた。

「じゃあ、そろそろ仕事があるから行くよ。またね、ハルカ」
「はい！バイバイ」

ようやく2人きりになると、急に静かに感じてしまった。
そんな沈黙を破るかのように、ユウはハルカに手を差し伸べてきた。

「・・・ははっ」

「なに笑つとんねん・・・」

「ううん。なんでもない」

ハルカは笑いながら、ユウの手を握った。

夏休みに1度ユウは大阪に帰っていったが、また愛知に戻ってきてハルカに告白してくれた。

不器用に支離滅裂な言葉だったけれど、ハルカにはしっかりと伝わった。

遠距離でも辛くない。

離れていても、こうして身近に感じることができるから。

誰もいない公園のベンチで2人並んで座っていたとき、こっそりキスされそうになったときも、ハルカは笑えてきてしまった。

「たえろ！こういうときくらい！」

「だ・・・だって照れるんだもん」

「俺かて照れるわ」

2人の唇がゆっくりと重なった。至近距離でお互いを確かめ合っていた。

いつも近くにいた。そして、遠くにいた。

素直になれなくて、時間がかかってしまった。だけど、2人はまだ遅くない。

「なんかここまで来んのにえらい多くの人に迷惑かけたなあ・・・」

「ほんとだよね・・・」

お互いに見合って、笑い合った。

今度は恩返しの意味もかねて、2人で一緒にいよう。

それが、2人の愛の形だから——・・・

最終回 近距離で（後書き）

とりあえず終わりましたが、いくつか ん？ って思うところがあると思います。

そういうのはエピソードで書く予定です。

だから、もう少しだけ彼らの物語にお付き合いください。

エピソード1 カオル

これで何度目の来日になるだろうか。ようやくオフの日ができたので、桜井薫^{かある}はマネージャーのイ・スオンと一緒に出かけることにした。

「てつきりハルカさんのところへ行くと思ってました」

スオンが正直に言う。

「それもいいと思ったんだけどね、彼氏がいるのにあんまり困らせるわけにはいかないしね」

季節は1月。今回来日したことはまだ立花悠^{はるか}には言っていない。

「余計なことかもしれませんが・・・本当にこれでいいんですか？」

「俺は彼女にとって都合のいい男になればいいと思ってる。それにスオンさんが考えてるようなことじゃないんだ」

「でもっ・・・」

まだしつこく何か言おうとするスオンに対し、カオルは苦笑しながら言い放った。

「俺も余計なこと言うけど、普通さ、見知らぬ日本人の女の子捕まえて『女装したカオルに似てるから間違えた』なんて言う？」

それは、ハルカたちが修学旅行でたまたま韓国に来ていたときのことだ。

スオンはそれを思い出したらしくて、しばらく黙り込んでしまった。あるいは別の考えがあったのかもしれない。

からかつて言っただけなのに、今思い返してみると確かに変だとカオルは思った。その真意を確かめようと隣を見たとき、なぜかスオンがいないことに気づいた。

一緒に歩いているつもりだったが、はぐれてしまったらしい。

「カオルさん!？」

その声に反応して振り返ると、こつちに向かって駆け寄ってくる女の子が見えた。ハルカだ。

「ハルカ? え・・・だって今日平日じゃ」

「授業が休講になったんです。だから1人で買い物。カオルさんは？」

「俺も買い物かな」

こんな所で偶然出会えたことにカオルは感謝した。買い物といつても、カオルはわざわざ東京から名古屋まで来ているが。

「こつちに来るんだったら言ってくださいよ。今日だったら私いろいろ案内することできたのに・・・」

「ごめんごめん。明日にはもう向こうに帰らなくちゃいけないから言わなくてもいいと思ったんだ」

そのとき、ハルカが辺りを気にしていることがわかった。

「どうしたの？」

疑問に思ったカオルが訊ねると、ハルカは当然のことを口にする。

「1人で来たんですか? スオンさんは？」

「ああ・・・うん、もうすぐ来ると思うよ。たぶん」

「たぶんって・・・カオルさん、あんまりスオンさんに迷惑かけちゃダメですよ。スオンさん結婚されてるんですよね? 大事な家族だっているかもしれないのに」

「・・・思い出した」

ようやくカオルの中で引っかかっていたものが取れたような気がした。

ハルカが何のことだかわからなくてきょとんとしているのを見て、カオルは苦笑してしまった。

——都合のいい男か……

「ハルカ、今日はもう帰るよ。スオンさん、捜さなきゃだしね」

「私も手伝います」

「大丈夫だよ。ケータイあるからすぐに見つかる。じゃあね、ハルカ」

その後、2人は手を振って別れた。

それはとても短い会話だったが、カオルにとってはいろいろなことに気づけた時間になった。

ようやくわかった。カオルがハルカに対して抱いていた感情の正体が。

カオルがさつきスオンと会話した場所まで戻ると、その近くのベンチにスオンが所在無げに座り込んでいた。

「スオンさん」

その名を呼ぶと、ぱつと顔を上げて急いでこっちに駆け寄ってくる。まるで犬のようだ。

「1人にしないでくださいよ……韓国じゃないんだから全然方向わかんないんですよ!」

「はは……ごめんなさい」

軽い調子で謝って、カオルはさつきまでスオンが座っていたベンチに腰掛けた。

「今さつきハルカに会ったんだ」

スオンが固まるのがわかった。それをカオルは横目で確認した。
「ごめん・・・もうかなり昔のことだったから忘れてたんだ。スオンの娘のこと・・・確かにハルカに似てるかもね」

過去にスオンは1度日本人の女性と結婚したが離婚し、そのときに娘ともほとんど会えなくなってしまったのだ。

カオルも以前何度か遊んだことがある。父に会いに来た彼女の話し相手になっていたのだが、ずいぶん昔のことだから顔を忘れてしまった。

とにかく今思い返してみれば、確かに似ているかもしれない。その姿を見て、思わず韓国で話しかけてしまった理由もうなずける。

「・・・娘はもう20歳になります。早いもんですよ。こないだまでこんなにちっちゃかったのに」

スオンの目はどこか懐かしむようだった。

「ハルカさんを見て、一瞬間違えました。でも、娘は娘。ハルカさんはハルカさんだ」

「・・・・・・・・」

「今度会いに行ってみようと思います」

「それがいいですね。俺も一緒に行ってもいいですか？」

『どうしてそんなに優しくするの・・・？私は別に優しくしてもらいたいわけじゃないよ』

『なんていうか・・・俺はお前の都合のいい男になればいいんだよ』

『私は——お父さんだけに会いに来てるわけじゃない・・・・・・・・』

「カオルさんが来てくれればきっとあの子は喜びます」
スオンがとても嬉しそうに顔をほころばせる。

「そうだといいんですけどねー」

昔のことを思い出しながらカオルは答える。

都合のいい男……前にハルカに対しても言った言葉だ。
もうそろそろ卒業してもいいかもしれない。

今度は自分自身の幸せのために——……………

エピソード1 カオル（後書き）

なんとなく消化不良だった人物の1人、カオルについて書くことができました。

次回の更新は年内を予定しています。

エピソード2 小春

谷口小春が高校1年生のとき、立花悠ゆうと同じクラスになった。

名簿番号順で座ったら席が隣になり、彼の人懐っこい性格のおかげですぐに仲良くなることができた。

「大丈夫。俺が言うんやから大丈夫や」

何の根拠もなしにそんなことを言う男子だった。

その後、友達のちよつとした一言でユウに自分の気持ちガバレてしまった。

それがわかったとき、最初は恥ずかしくてたまらなかったが、友達の協力のおかげでなんとか告白をすることができた。

「うん……俺も」

たったそれだけしか言ってくれなかったけど、2人はつきうあうことにした。

幸せだった……ユウが黙って転校しようとするまでは……

「小春……どうしたん？ ばーつととるで」

授業が終わったというのに気づいていなかったらしい。小春はようやく自分がどこにいるのか悟った。

「あ……ごめん。ちよつと考え事してた」

慌てて立ち上がると、隣で一緒に授業を受けていた友達——ユウが苦笑して立ち上がった。

転校したユウは、向こうの高校で新たに好きな人ができてしまっ

た。

再会したとき頑張つて告白してみたが、結局フラれてしまうことになった。なんとなくわかっていたことだった。

今こうして小春がユウと一緒にの大学の大学に通っているのは自分のせいだ。

黙って会いに行き、そのときに事故に遭ってしまった。ユウはそれを自分のせいだと思い込んでしまったのだ。

「小春は次授業休みだよな？」

「うん・・・でも図書館でちょっと勉強せな・・・」

「ほな、俺も勉強しよ」

ユウが自分に気を遣っていることがわかった。こういう優しいところがまたユウの好きなところでもあった。

「ユウ君・・・1個だけ訊いてもいい？」

図書館へ行く途中、小春は今までずっと気になっていたことを初めて口にしようとした。

ユウは気軽に振り返ってきた。

「ええよ。どした？」

「私とつきおつてたとき・・・私のこと好きやった・・・？」

ユウの表情が変化したのを見て、小春はしまったと思った。

別にユウを困らせたかったわけではない。こんな優しい性格の彼をこんな些細なことで困らせたくないかった。

だけど、ユウはちゃんと答を返してくれた。

「当たり前や」

「……………今は、ちゃんと彼女さんのこと好きなんよね？」

ユウは少しだけ困ったように笑った。

「うん」

照れ屋だから、これ以上の言葉を言うつもりはないのだろう。それだけで小春は満足だった。

「ユウ君不器用やから心配や。ちゃんと彼女大事にせなあかんで」
本心だった。心から言えるその言葉。

こないだ今の彼女とつきあうことをユウの口から聞いたときには言えなかった言葉だった。

「……………ごめん」

とユウは一言。

「ごめんじゃないよ」

「ありがとう」

ようやく胸のつかえが取れた気がした。

小春は今でもユウのことが好きだ。でも、以前とは違う。ユウの心に変化が訪れたように、小春の考えもだんだん変わってきているのだ。

いつかユウと、ユウの彼女のハルカと一緒に遊びにいったらいいと思う。

そのときまでに自分の気持ちに整理をつけて、隣には優しい彼氏がいることを夢みて……………

エピソード2 小春（後書き）

長い間更新できなくてすいませんでした…

一応の完結です。

もっと短い話のつもりでしたが、ダラダラと続いてしまいました；

次回作もそのうち更新予定です。

また気楽に読んでくださったら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4916f/>

近距離恋愛中！

2010年10月15日18時55分発行